

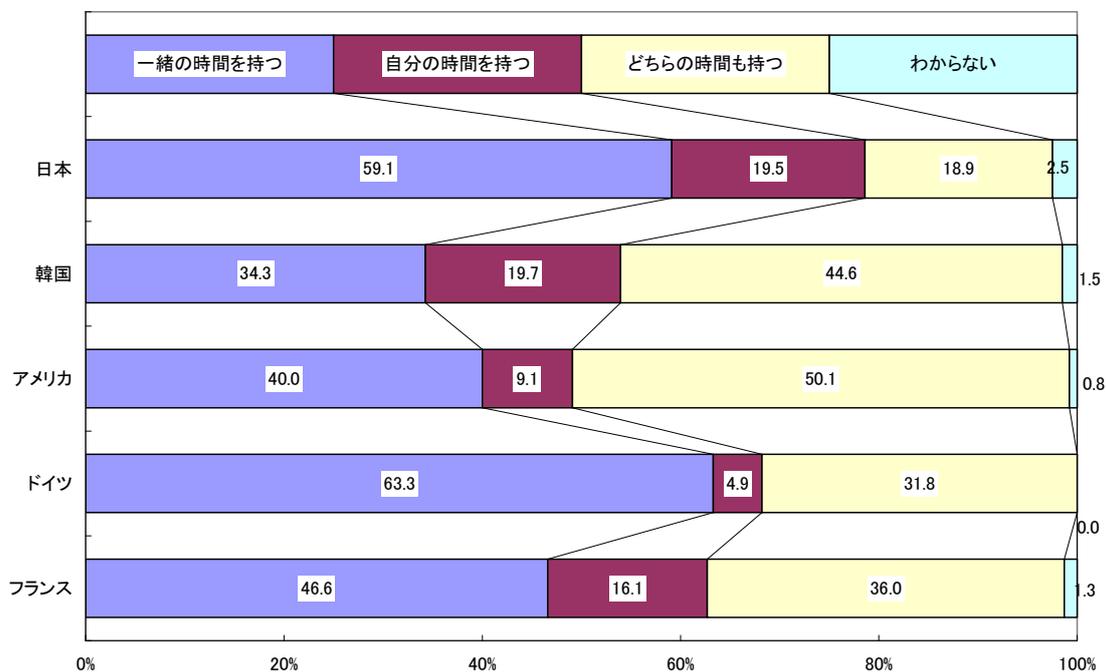
### Ⅲ 夫婦の時間・個人の時間 (Q2)

#### 1 調査結果の概要

「夫婦一緒に過ごす時間」と「自分のための時間」のどちらをより多く持とうとしているかをたずねた。図 3-10 は、この回答の単純集計の結果を示したものである。日本、ドイツ、フランスでは、「夫婦一緒に過ごす時間を持つようにしている」という回答が最も多く、それぞれ、59.1%、63.3%、46.6%を占めている。韓国とアメリカでは、「どちらの時間も持つようにしている」という回答が 44.6%、50.1%と、最も高い比率を示した。

なお、夫婦関係の個人化傾向の一端をうかがう指標ともなる、「夫婦それぞれが自分のための時間を持つようにしている」という回答の比率は、韓国（19.7%）と日本（19.5%）が相対的に高く、これにフランス（16.1%）が次ぎ、ドイツとアメリカは 10%未満の低い値を示した。

図 3-10 夫婦の時間と自分の時間



#### 2 時系列的変化

この設問は、第 3 回調査以降、継続的に用いられており、フランス以外の 4 カ国については 4 回の調査結果の推移をたどることができる。図 3-11 は、4 カ国の調査年次別の回答

結果を示したものである。

4カ国中類似したパターンを描いているのは、韓国とアメリカである。いずれも、近年ほど「夫婦一緒に過ごす時間を持つようにしている」という回答の占める比率が低下し、「どちらの時間も持つようにしている」という回答が最も高い比率を示している。「どちらの時間も持つようにしている」の比率は、4回の調査を通じて、韓国では19.5%から44.6%へ、アメリカでは32.7%から50.1%へと、20ポイント前後比率を上げていた。なお、ドイツも第5回調査まではこれら2カ国と類似した傾向を示していたのだが、今回の調査では「夫婦一緒に過ごす時間を持つようにしている」が前回調査より10ポイント以上比率を伸ばし、5か国中最もこの回答が多い結果となった。

日本については、第3回調査以来、「夫婦一緒に過ごす時間を持つようにしている」が一貫して多数派の意見であり、4回の調査を通じてその比率は、42.3%から59.1%へと17ポイントほど上昇している。日本人の夫婦関係において、固定的な性別役割分業とこれと関連の深いコミュニケーションの希薄さはしばしば指摘されるところだが、少なくとも現代の高齢者夫婦に関しては、夫婦で過ごす時間を重視しようとする態度はきわめて強いものがあるといえる。

日本の特徴としてもう1つ注目したいのは、韓国と並んで、「夫婦それぞれが自分のための時間を持つようにしている」という回答が、アメリカ、ドイツに比べて相対的に高い比率を占めることである。日本におけるその比率は、4回の調査を通じて25.0%から19.5%へと6ポイントほど下がってきているとはいえ、なお一定の割合を占め続けている。

図 3-11 調査年次別・夫婦の時間と自分の時間

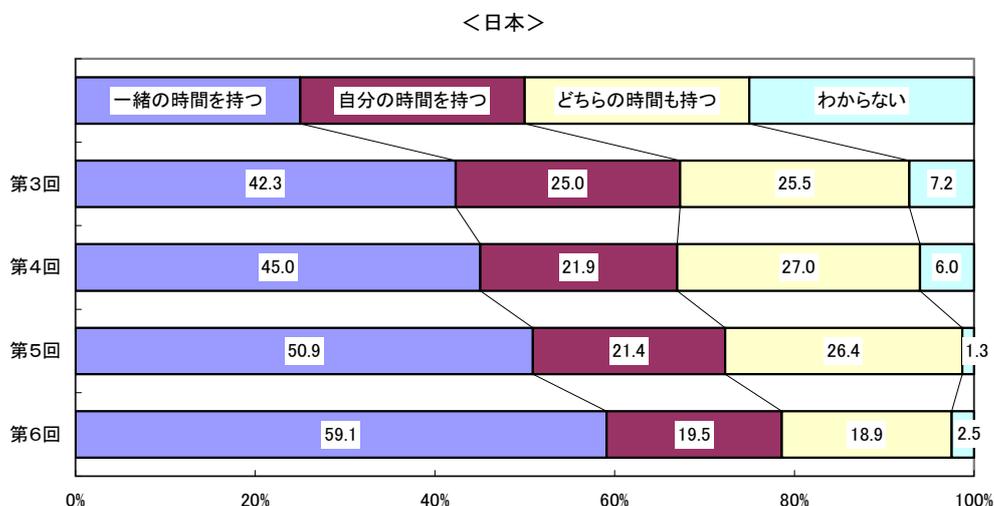
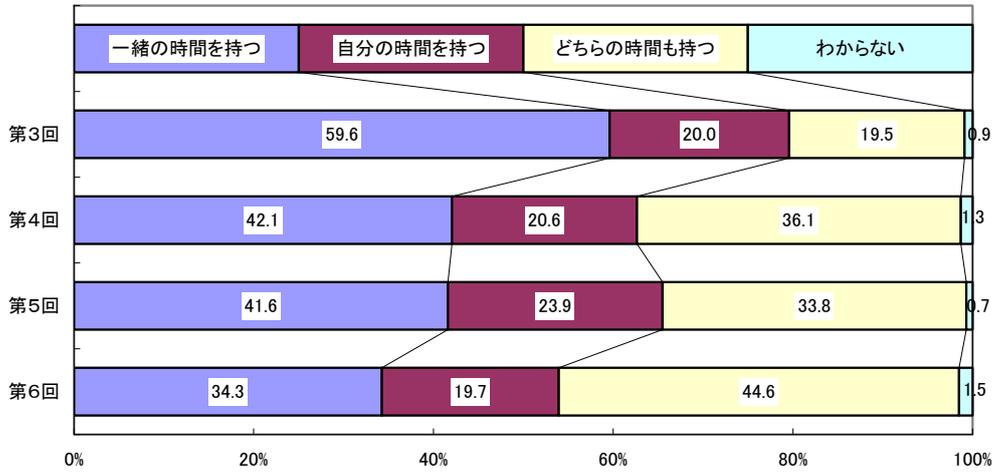
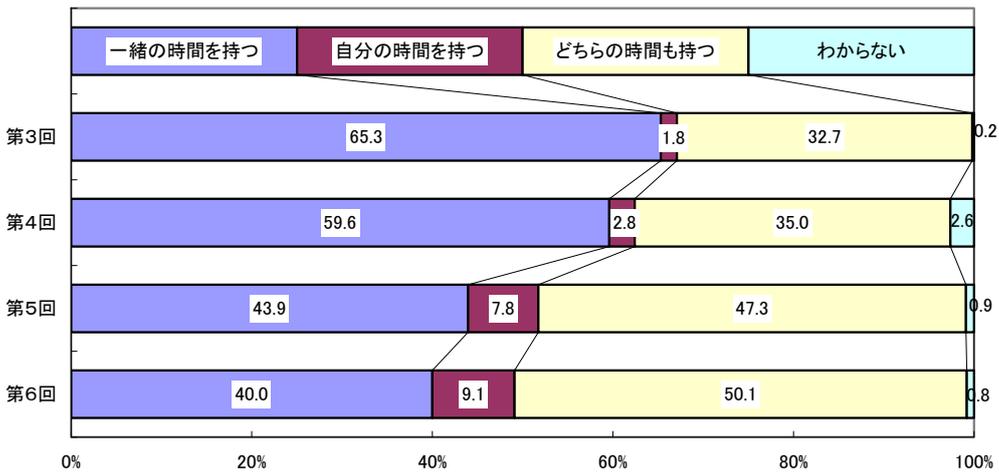


図 3-11(続き) 調査年次別・夫婦の時間と自分の時間

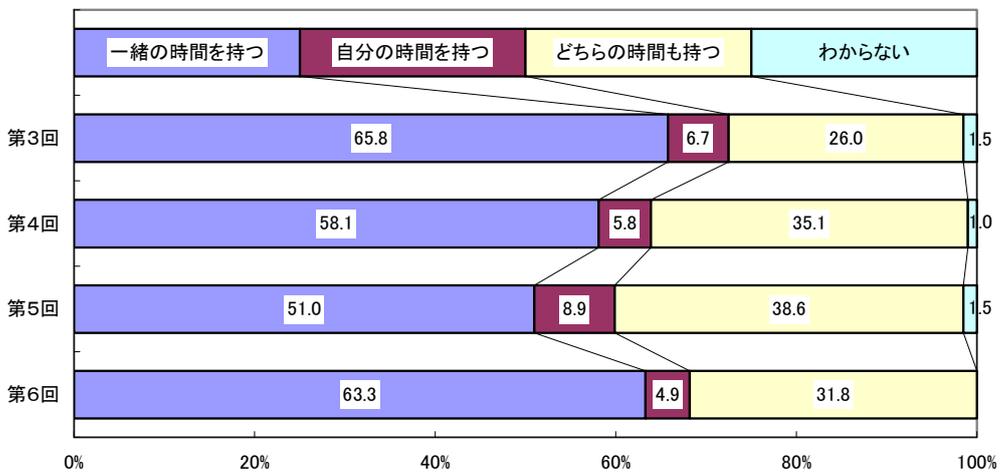
<韓国>



<アメリカ>



<ドイツ>

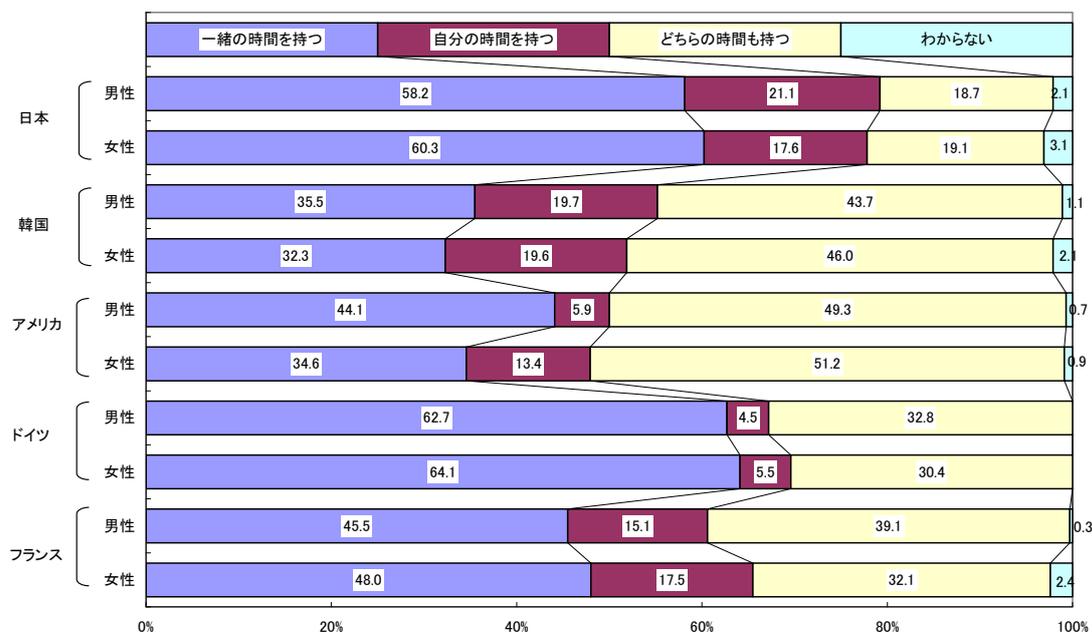


### 3 男女別比較

図 3-12 は、各国のこの設問に対する回答を男女別に示したものである。いずれの国でも顕著な男女差はみいだせず、むしろ国による差異のほうが大きい。日本の場合は、「夫婦一緒に過ごす時間を持つようにしている」は男性 58.2%、女性 60.3%、「夫婦それぞれが自分のための時間を持つようにしている」は男性 21.1%、女性 17.6%、「どちらの時間も持つようにしている」は男性 18.7%、女性 19.1%と、いずれも近似した値を示していた。

しいて男女差のある国を挙げるとすれば、アメリカである。「夫婦一緒に過ごす時間を持つようにしている」は男性 44.1%、女性 34.6%、「夫婦それぞれが自分のための時間を持つようにしている」は男性 5.9%、女性 13.4%と、男性のほうが夫婦の時間をより重視する傾向がみられた。

図 3-12 男女別・夫婦一緒に過ごす時間と自分の時間



### 4 年齢階層別比較

前述したように、この設問に対する回答には大きな男女差はみいだせない。またこの設問は夫婦そろっている人に限定してたずねているため、年齢階層と性別の両変数を組み合わせると、とりわけ高年齢層の部分でサンプルが少なくなる。そこでここでは、男女込みにして年齢階層のみによる傾向の違いをみていくことにする。

図 3-13 によると、まず日本では、「夫婦一緒に過ごす時間を持つようにしている」とする人の比率がどの年齢層でも最も高い。そして、おおむね年齢階層が高くなるにしたがっ

てその比率は増していくが、85歳以上の最も高齢な層では、70.5%から52.6%へと20ポイント近い低下を示す。年齢階層別の「夫婦一緒に過ごす時間を持つようにしている」の回答傾向に関して、日本と類似した動きを示すのが、アメリカ、ドイツ、フランスである。3カ国とも80代前半まではおおむね比率が上昇し、85歳以上で低下している。韓国については、70代前半までは上昇、70代後半以降は低下と、ピークを示す年代がより早いことが特徴的である。

韓国とアメリカでは、今回調査において、「どちらの時間も持つようにしている」という回答が最も多数派を占めていた。これら2カ国におけるこの回答の比率をみると、韓国では70代後半を底として、またアメリカでは80代前半を底として、より高齢な層において比率の上昇がみられる。85歳以上の最高齢層では、韓国では60.0%、アメリカでは52.6%の人が、「どちらの時間も持つようにしている」と回答していた。

図 3-13 年齢階層別・夫婦の時間と自分の時間

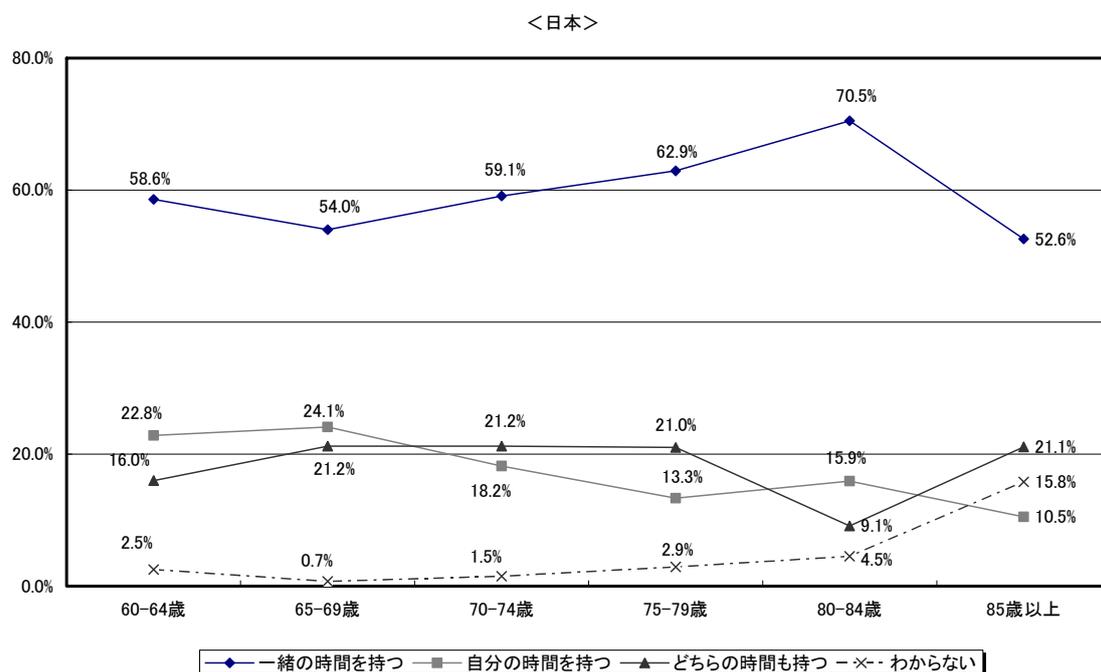


図 3-13(続き) 年齢階層別・夫婦の時間と自分の時間

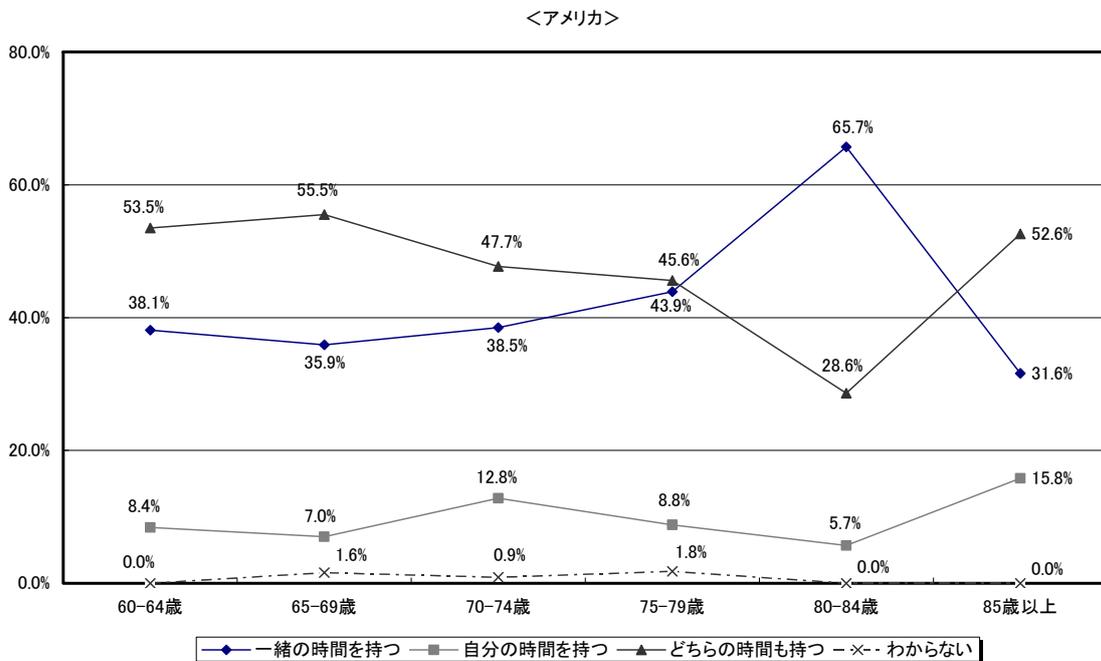
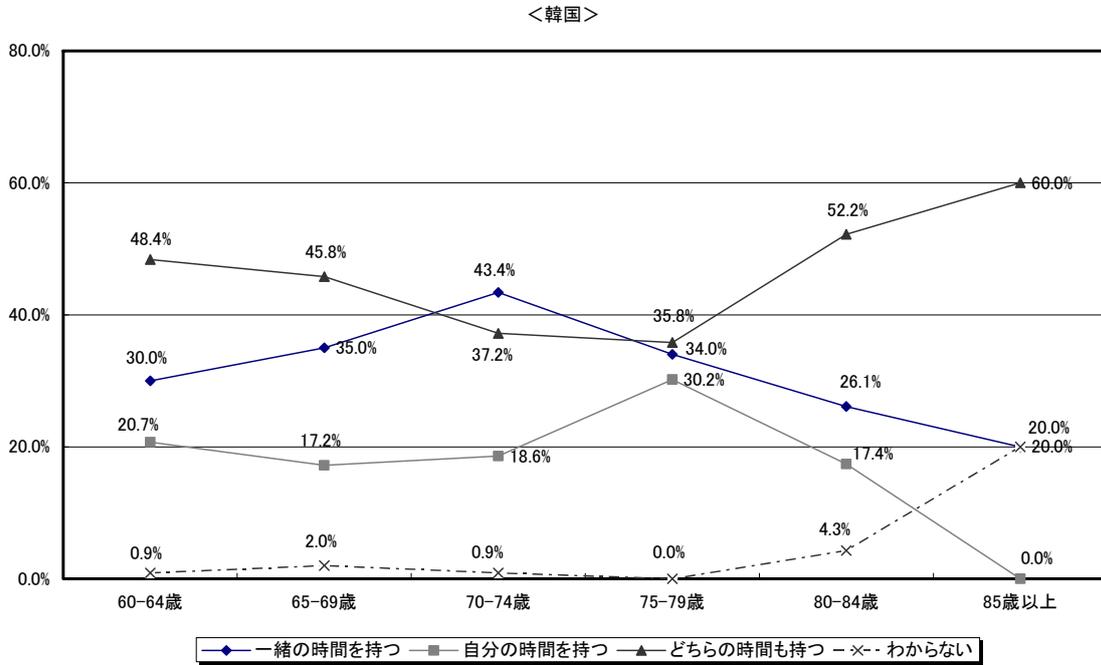
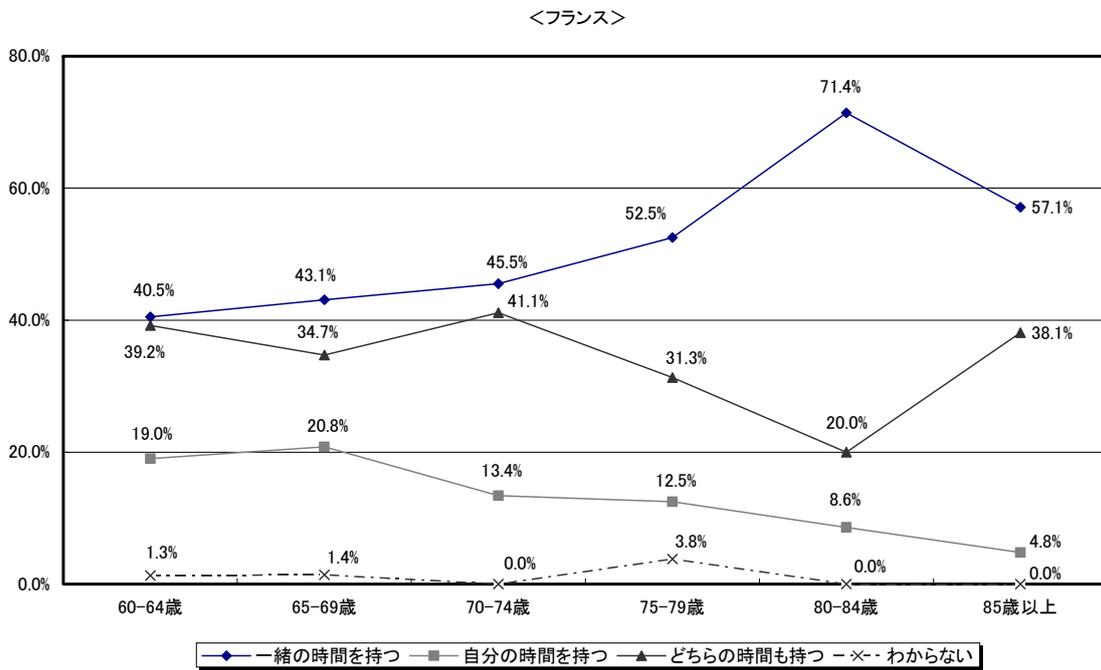
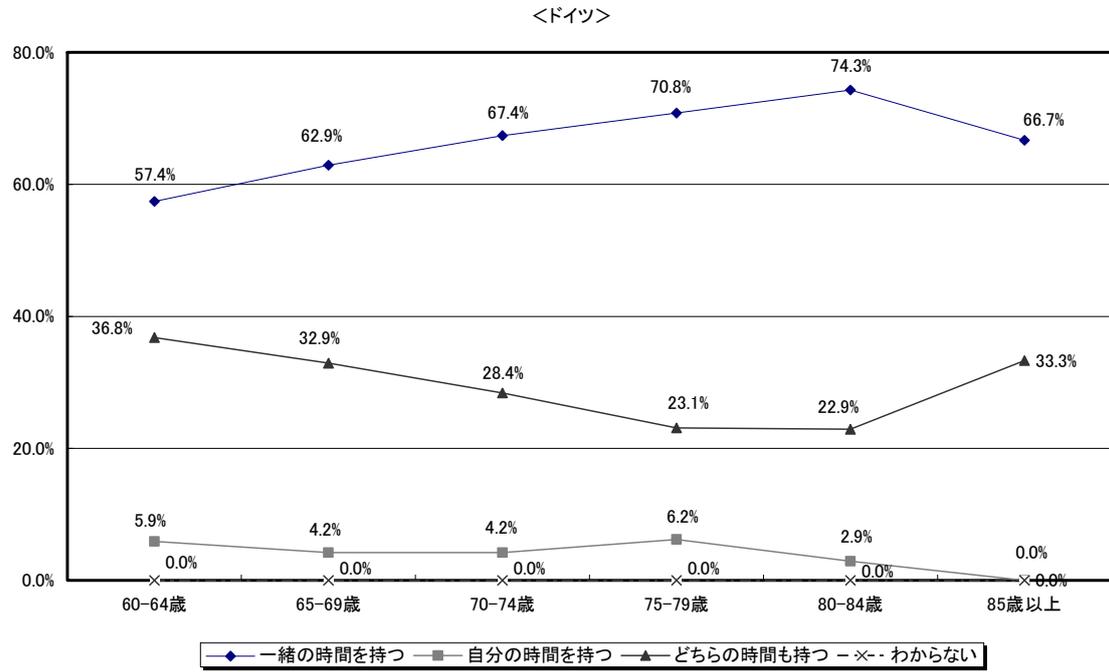


図 3-13(続き) 年齢階層別・夫婦の時間と自分の時間



## IV 別居子との接触頻度 (Q4)

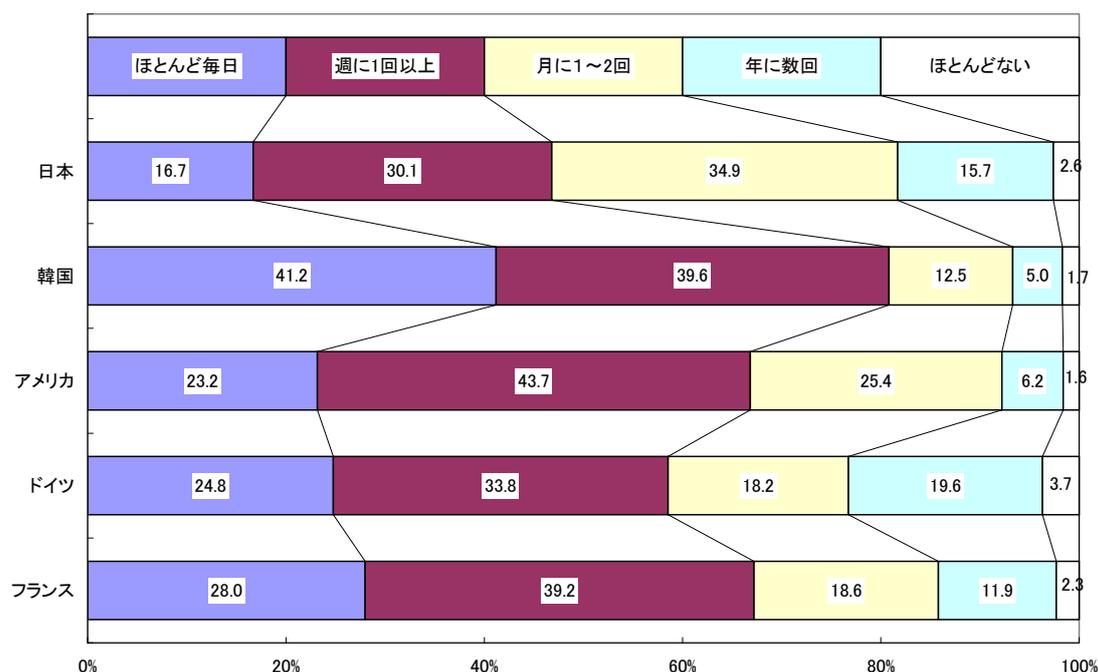
### 1 調査結果の概要

図 3-14 は、別居子との接触頻度に対する回答の国別の単純集計結果である。日本の高齢者が別居子と接触する頻度は、「月に1～2回」(34.9%)を最頻値として、以下、「週に1回以上」30.0%、「ほとんど毎日」16.7%、「年に数回」15.7%などが続き、5カ国中最も会う頻度が低い傾向が確認できる。

各国の最頻値に注目すると、韓国、ドイツ、フランスは「週に1回以上」で、それぞれ43.7%、33.8%、39.2%を占めている。アメリカについては、「ほとんど毎日」が41.2%を示し、最頻値となっている。別居子と「ほとんど毎日」接触があるという比率は、アメリカをトップとして、韓国、ドイツ、フランスの3カ国でも24%前後の値を示しているのに対し、日本のポイントの低さが目立つ。

前章でみたように、日本及び韓国に比べ、欧米3カ国では子どもとの同居率が低い。したがって、これら欧米諸国では、別居を前提として老親と成人子が意識的にコミュニケーションを図ろうとしている様子がうかがえる。他方、日本と韓国は、子どもとの同居率が相対的に高いという点で共通しているにもかかわらず、日本ではとりわけ別居子との交流が不活発であるといえる。

図 3-14 別居子との接触頻度



## 2 時系列比較

この設問は、過去4回の調査でも調査項目として用いられてきた。ただし、第5回調査以降、質問文に若干の変更が加えられた点には留意したい。第2～4回では、「どのぐらいの頻度で会われますか」という表現で、対面的な接触の頻度に限定してたずねていた。また、接触の対象は「別居しているお子さん方」という表現により、別居子が複数いる場合は、それぞれとの接触頻度を総合して答えてもらっていた（ただし、第2回は「別居しているお子さん」という表現であるため、どちらにも解釈できる）。しかし第5回以降は、各種情報通信機器の発達を考慮に入れて、対面接触のみならず電話等による間接接触も含めるとともに、複数の別居子がいる場合は、そのうち最も頻繁に接触のある子ども一人に限定して回答してもらった。前者の変更は、接触頻度を高める方向に作用し、後者の変更は数値を低下させる方向に作用するだろう。

以上のような理由により、この設問に関して厳密な意味での時系列比較はおこなえない。しかし、参考までとして、第2回から第6回までの時系列データを表3-2に示した。

表 3-2 別居子との接触頻度(時系列)

(別居している子供が1人以上いる方に)

(%)

	日 本						ア メ リ カ						韓 国						ド イ ツ						フ ラ ンス	
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第1回	第3回	第4回	第5回	第6回	第3回	第4回	第5回	第6回	第1回	第6回			
1 ほとんど毎日		14.4	14.3	13.5	16.3	16.7		15.3	21.2	19.4	36.3	41.1		9.1	6.2	12.1	23.2	31.2	27.6	35.5	24.3		27.9			
2 週に1回以上		19.1	17.2	16.7	30.9	30.1		35.7	40.8	36.0	45.4	39.4		13.8	20.5	33.4	43.7	29.4	30.9	40.3	34.0		38.9			
3 月に1～2回		33.2	30.0	27.2	33.7	34.9		18.6	17.9	18.1	11.4	12.5		28.5	33.9	30.8	25.4	20.2	23.9	11.3	18.1		18.5			
4 年に数回		30.0	34.7	37.9	16.9	15.7		20.6	13.0	19.6	4.1	5.0		46.3	38.0	22.4	6.2	16.6	13.8	8.9	19.5		11.9			
5 ほとんどない		3.3	3.6	4.6	2.0	2.6		9.6	6.7	6.2	2.4	1.7		2.3	1.4	1.4	1.6	2.1	3.0	4.0	3.7		2.2			
6 別居している子供はいない						0.0						0.2					0.0				0.2		0.7			

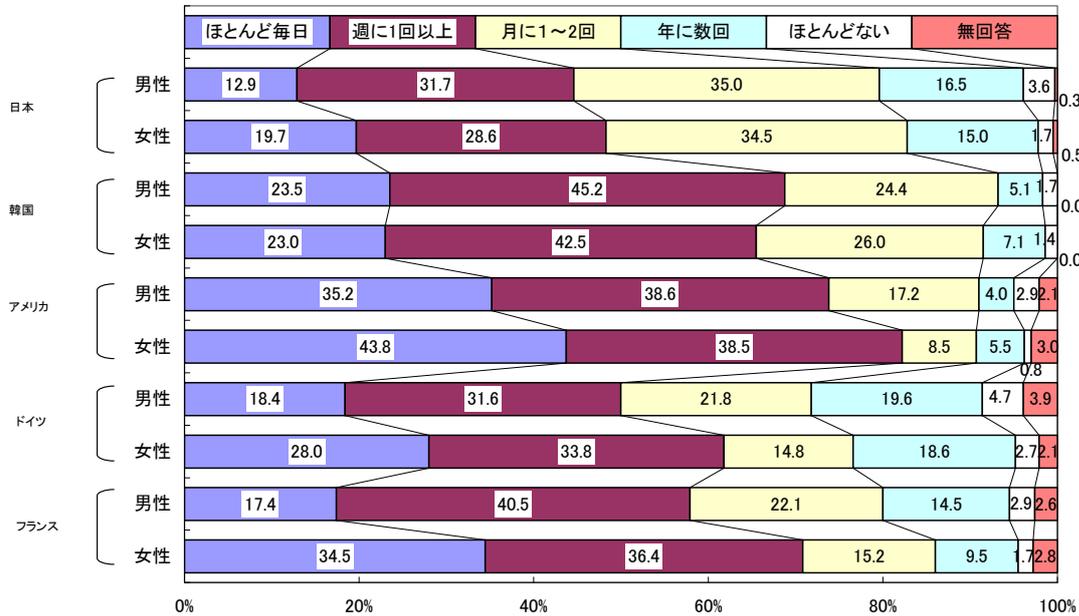
注) 5は、第2～4回は「ほとんど会わない」

韓国とアメリカでは、近年ほど「ほとんど毎日」接触があるという回答の比率が高くなっており、韓国では「週に1回以上」という回答も同様である。日本では「ほとんど毎日」という回答の比率はあまり変わらないものの、「週に1回以上」の比率が第1回から第6回調査にかけて1.5倍程度に伸びている。ドイツに関しては必ずしもそのような動向は確認できないが、全般的には、電話等を介した間接接触も含めてたずねた影響が現われているのではないかと推測される。

### 3 男女別比較

図 3-15 は、この設問に対する各国対象者の回答を、男女別に示したものである。韓国以外の4カ国では、男性より女性のほうが別居子との交流頻度が高い傾向にある。「ほとんど毎日」接触があるという回答に注目すると、日本では、男性12.9%、女性19.7%となっている。他の3カ国についても、男性、女性の順に比率を挙げると、アメリカ35.2%、43.8%、ドイツ18.4%、28.0%、フランス17.4%、34.5%という結果である。一般に、近年の親族づきあいは父系中心・男性中心から、双系的、あるいは母系中心・女性中心へと変化しているといわれる。これらのデータも、そうした親族づきあいの現代的特質を推測させるものである。

図 3-15 男女別・別居子との接触頻度



#### 4 年齢階層別比較

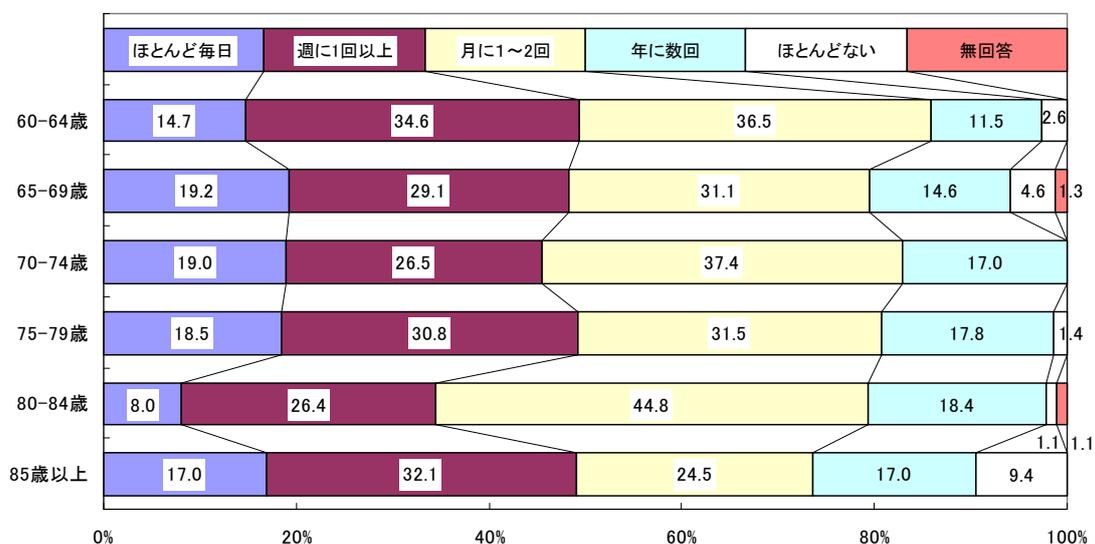
この設問に対する回答には、前述したように男女差がみられるとはいえ、それは大きなものとはいえない。そこで、図 3-16 には、男女を込みにして、年齢階層別にクロス集計をおこなった結果を示した。

5カ国ともその傾向性を一義的に断定することは難しいが、韓国は、年齢階層が上がるにしたがっておおむね接触頻度が落ちる傾向がみられる。対照的にドイツとフランスでは、年齢階層の高まりとともに接触頻度がおおむね高まっている。日本とアメリカは、やや不規則な増減を示しながらも、全体として大きな変動はみられない。ただし、単純集計レベルの日米の差異を反映して、日本では一貫して接触頻度は低く、アメリカではどの年齢層でもおおむね高い。

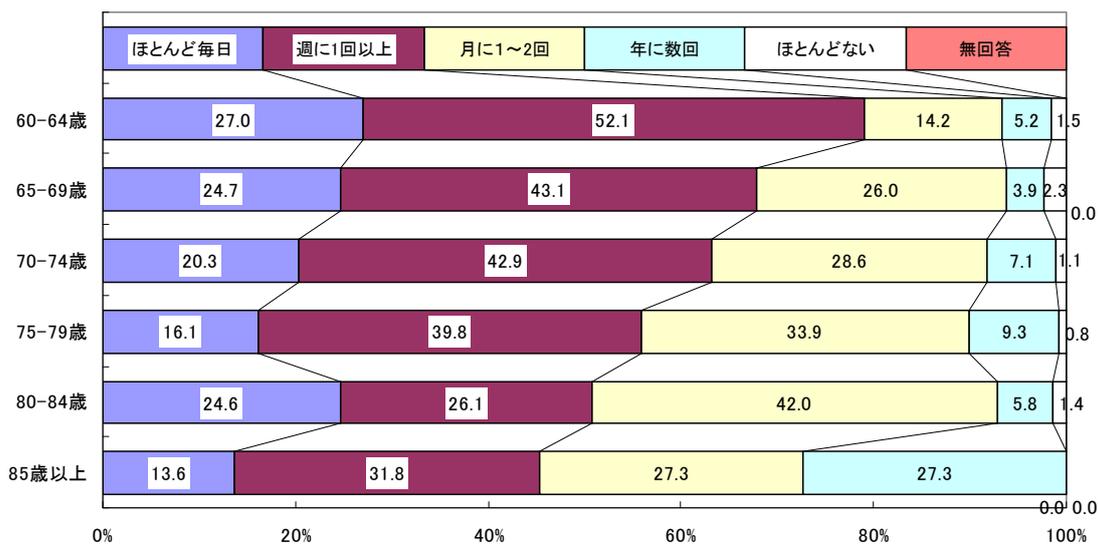
一般に、高齢になるほど子どもとの接触に心理的満足や実質的な援助を求める傾向にあることを考えれば、日本の動向はそのようなニーズに対応しておらず、韓国の場合にはむしろ逆行する動向を示しているといえよう。

図 3-16 年齢階層別・別居子との接触頻度

<日本>



<韓国>



<アメリカ>

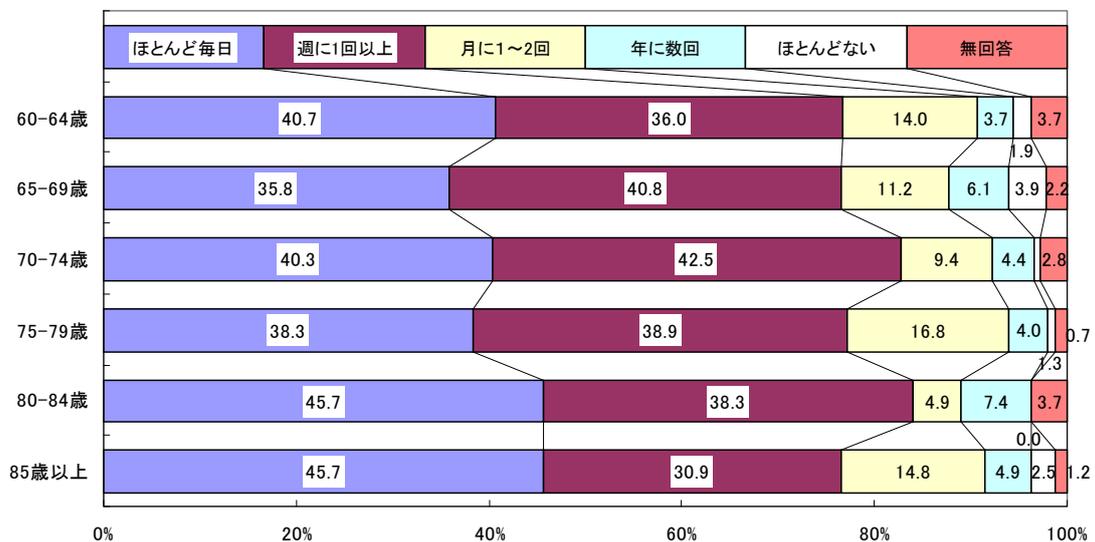
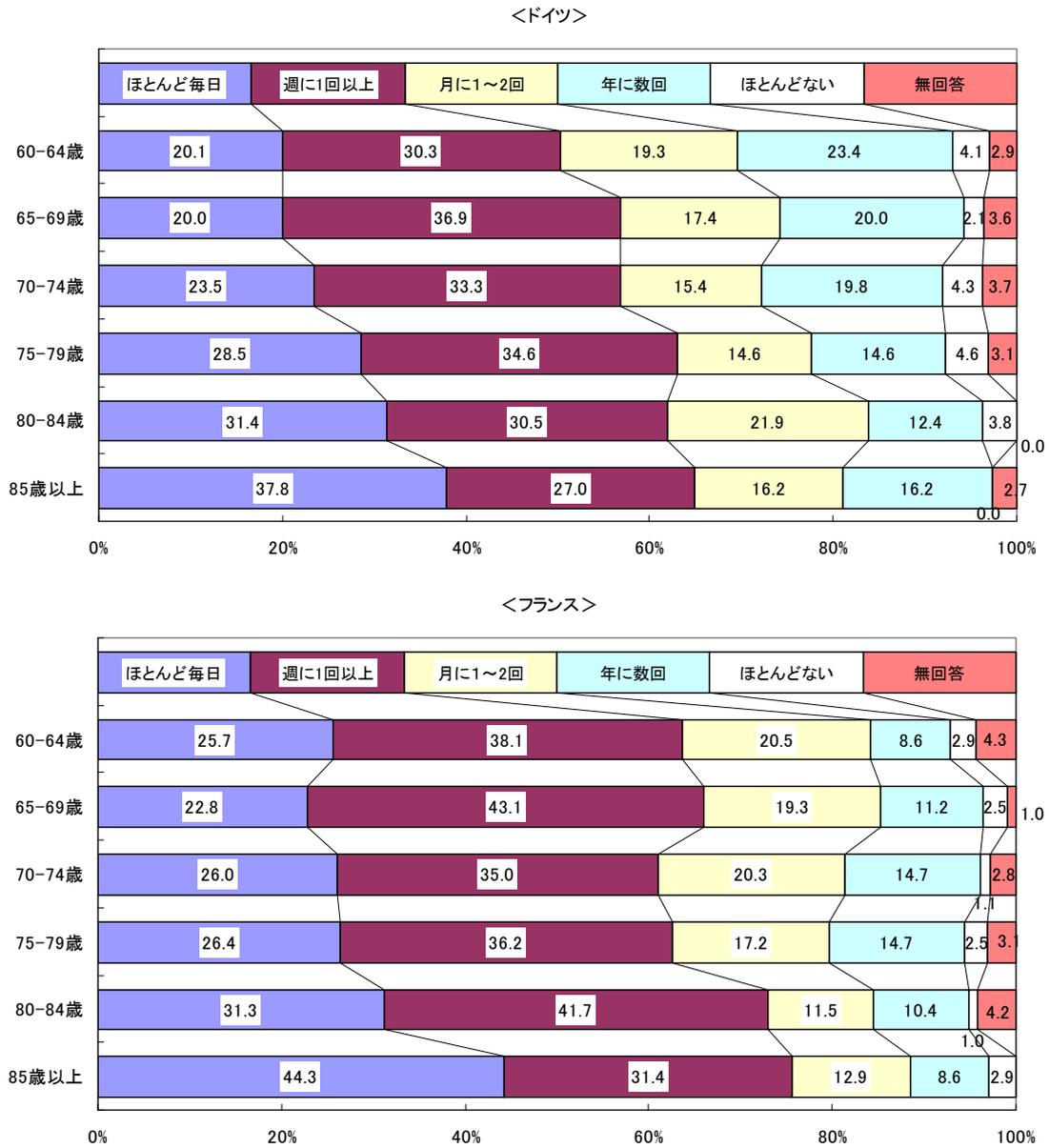


図 3-16(続き) 年齢階層別・別居子との接触頻度



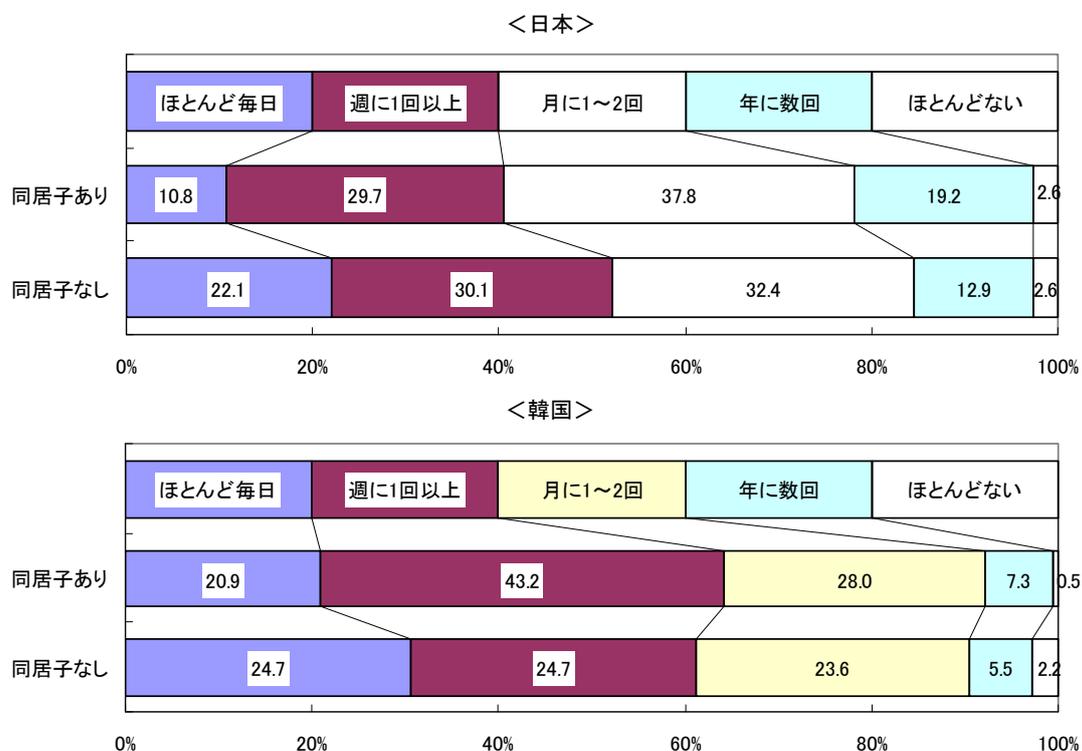
## 5 世帯類型による差異

日本と韓国における高齢者の立場には、儒教的倫理に基礎づけられた家規範の影響がなお残っており、高齢な親への情緒的・実質的支援への社会的期待は高いものと推測される。別居子との直接・間接の接触は、親への支援状況を推測する一つの指標となりうる。ただし、欧米諸国と比べ子どもとの同居率が相対的に高い日本と韓国において、子どもとの接触に対するニーズは、同居子がいる場合はその存在により充足される面があるかもしれな

い。

そこで図 3-17 に、日本と韓国に限って、同居子の有無別に別居子との接触頻度につきクロス集計をおこなった結果を示した。日本についてみると、同居子がない人はいる人よりわずかながら接触が密な傾向が確認できる。「ほとんど毎日」接触があるという人は、「同居子あり」10.8%、「同居子なし」22.1%と、2倍のポイントを示した。ただし韓国の場合は、「ほとんど毎日」接触がある人の割合が、「同居子あり」20.9%、「同居子なし」24.7%と、後者が高いものの大きな差異とはいえない。また「週に1回以上」接触があるという人の比率は、「同居子あり」43.2%、「同居子なし」24.7%と、後者のほうが低い値を示した。

図 3-17 同居子の有無別・別居子との接触頻度

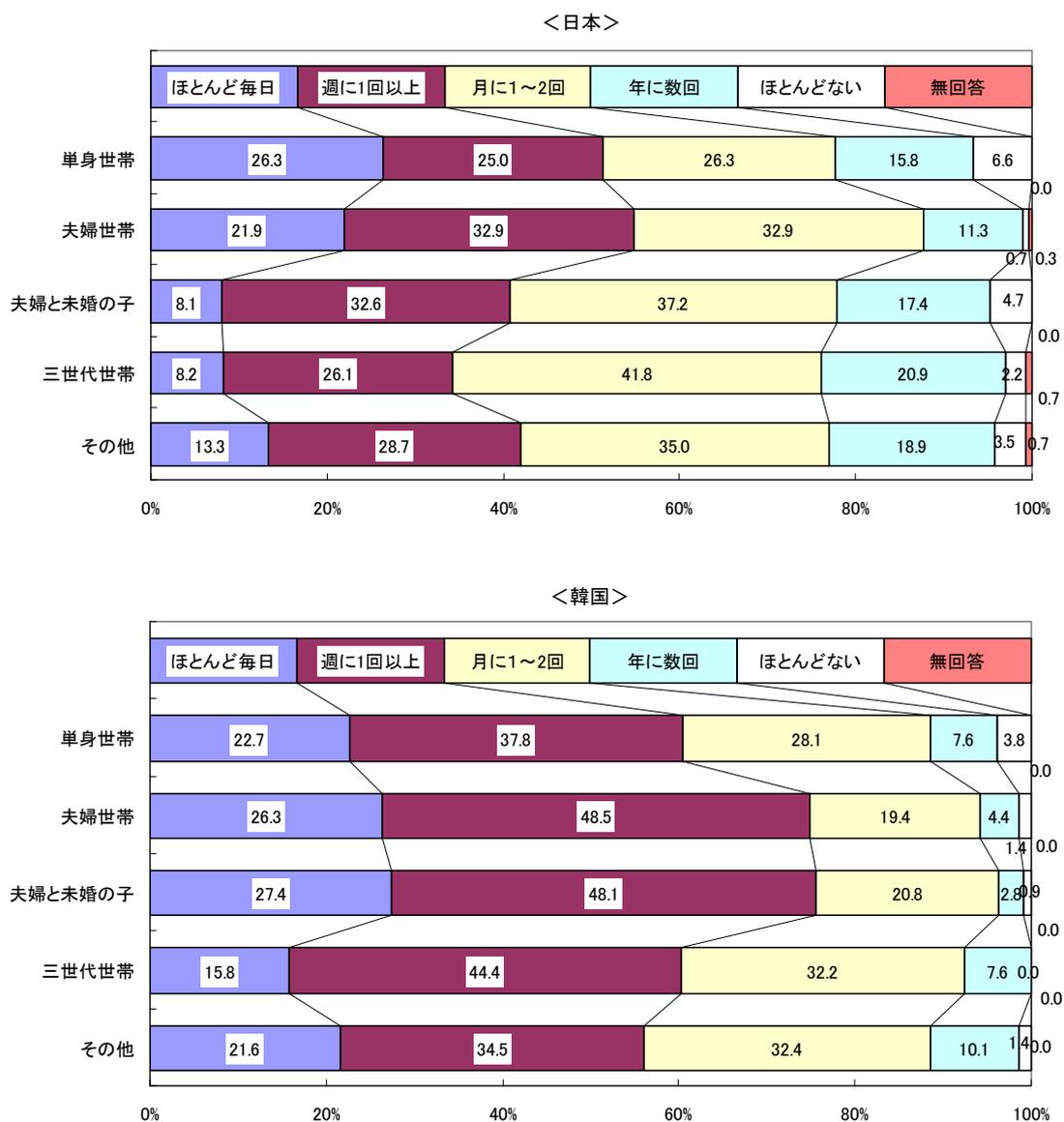


さらに、図 3-18 には、日本と韓国に限って世帯類型別に別居子との接触頻度のクロス集計をおこない。その結果を示した。日本については、「夫婦と未婚の子からなる世帯」および「三世帯世帯」の場合の接触頻度が低い反面、「単身世帯」と「夫婦世帯」では相対的に接触頻度が高くなっている。しかしその程度は、「ほとんど毎日」と「週に1回以上」を合計しても50%を少し越える程度であり、他の世帯類型と比べて著しく差異があるわけではない。韓国についても「三世帯世帯」の接触頻度が低い傾向は確認できるものの、もっとも社会的孤立が問題になりやすい「単身世帯」でも、「ほとんど毎日」「週に1回以上」を

合計した比率は、「三世代世帯」とほぼ変わらない60%程度の値に過ぎない。

以上のことから、日本と韓国では、高齢者が子どもと別居することを前提として、相互に交流する慣習や規範がなお定着していないものと推測される。

図 3-18 世帯類型別・別居子との接触頻度



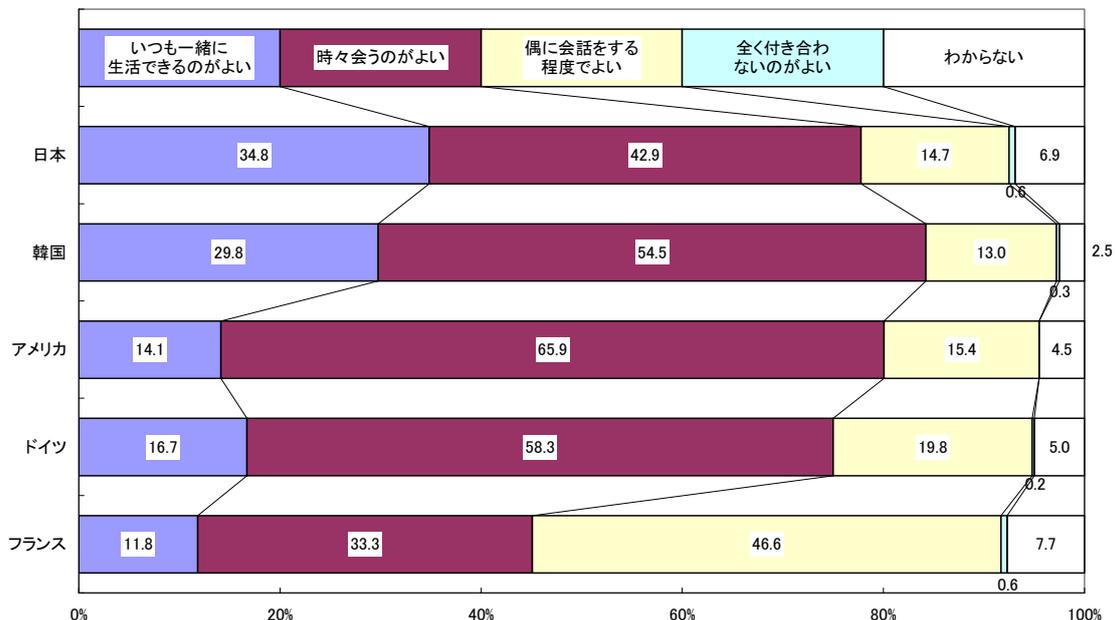
## V 家族観 (Q5)

### 1 調査結果の概要

各国の高齢者は、子どもや孫とどの程度の日常的な交流を望んでいるのだろうか。図 3-19 は、この設問に対する回答の、国別の単純集計の結果を示したものである。日本の結果に注目すると、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」を支持する人が 42.9%と最も多く、以下、「いつも一緒に生活できるのがよい」34.8%、「たまに会話をする程度でよい」14.7%などがこれに次いでいる。韓国も日本と近い傾向を示しており、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」54.5%、「いつも一緒に生活できるのがよい」29.8%が主な回答である。欧米3カ国については、アメリカとドイツの意見分布が似通っており、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が 60%前後、「たまに会話をする程度でよい」20%弱、「いつも一緒に生活できるのがよい」が 15%前後と、日本や韓国に比べ子どもや孫とのつきあいに距離をおく傾向がみられる。この傾向はフランスにおいて最も顕著であり、「たまに会話をする程度でよい」が 46.6%で最頻値となっており、これに「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が 33.3%で次いでいる。

前節でみたように、これら欧米3カ国および韓国は、日本に比べて別居子との接触頻度が高かった。欧米3カ国については、密な接触がなされていても、家族観、近親とのつきあい観においては互いの独立性やプライバシーを尊重しようとする姿勢が強いのかもしれない。

図 3-19 老後における子や孫との付き合い方



## 2 時系列比較

この設問は、過去5回の調査でも採用されているため、フランス以外の4カ国について、時系列的変化をみるため図3-20を作成した。

日本と韓国においては、かつて多数派の意見であった「いつも一緒に生活できるのがよい」を支持する人が減少し、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が多数派の意見となっている。具体的な数字をあげると、「いつも一緒に生活できるのがよい」は、日本では59.4%から34.8%へ、韓国では83.3%から29.8%へと大幅にポイントを下げている。替わって、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」という意見を支持する人は、日本では30.1%から42.9%へ、韓国では5.7%から54.5%へとポイントを上げており、とりわけ韓国の変化が大きいことが注目される。

一方、アメリカとドイツでは、相対的には安定した意見傾向がみられ、いずれの国でも「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が一貫して多数派の意見になっている。しいて変化を挙げるとするなら、アメリカにおいて第2回調査以降、「いつも一緒に生活できるのがよい」という意見を支持する人が、2.7%から14.1%へと増加しており、「たまに会話をする程度でよい」は一貫した傾向はつかみにくいものの、第6回調査では15.4%と、第2回調査に比べて比率が半減している。日本や韓国では「家族の個人化」ともいえるべき意識傾向が強まっているのに対し、小幅な変化とはいえ、アメリカでは家族志向、家族主義的価値規範が強まる傾向を推測させる。

図3-20 調査年次別・老後における子や孫との付き合い方

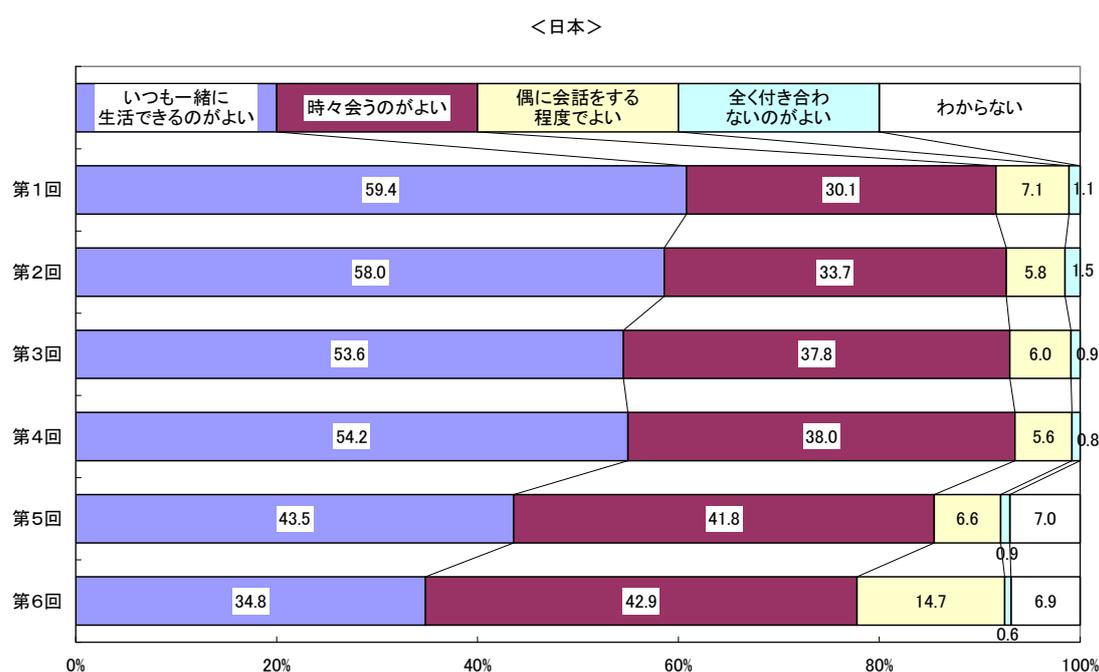
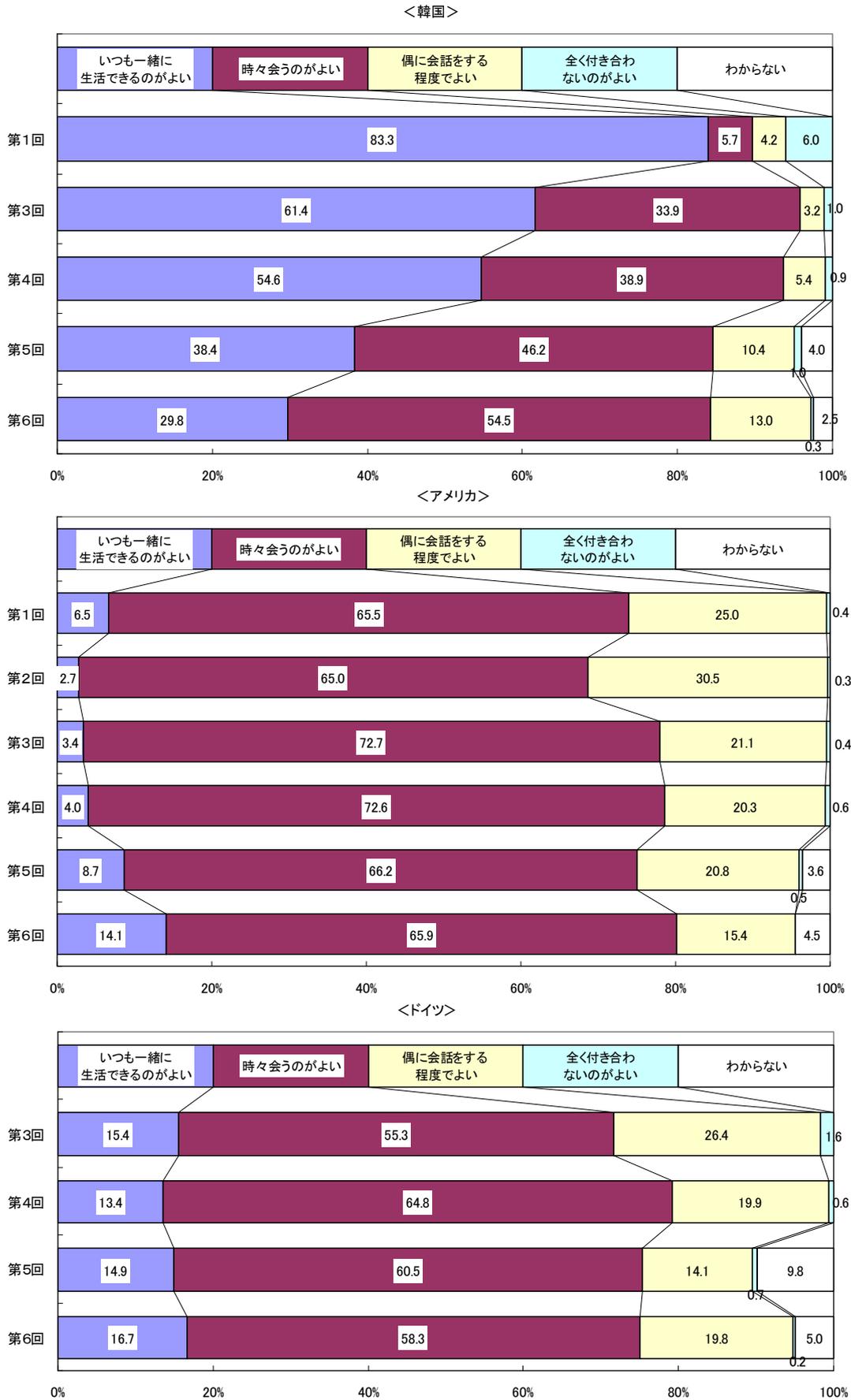


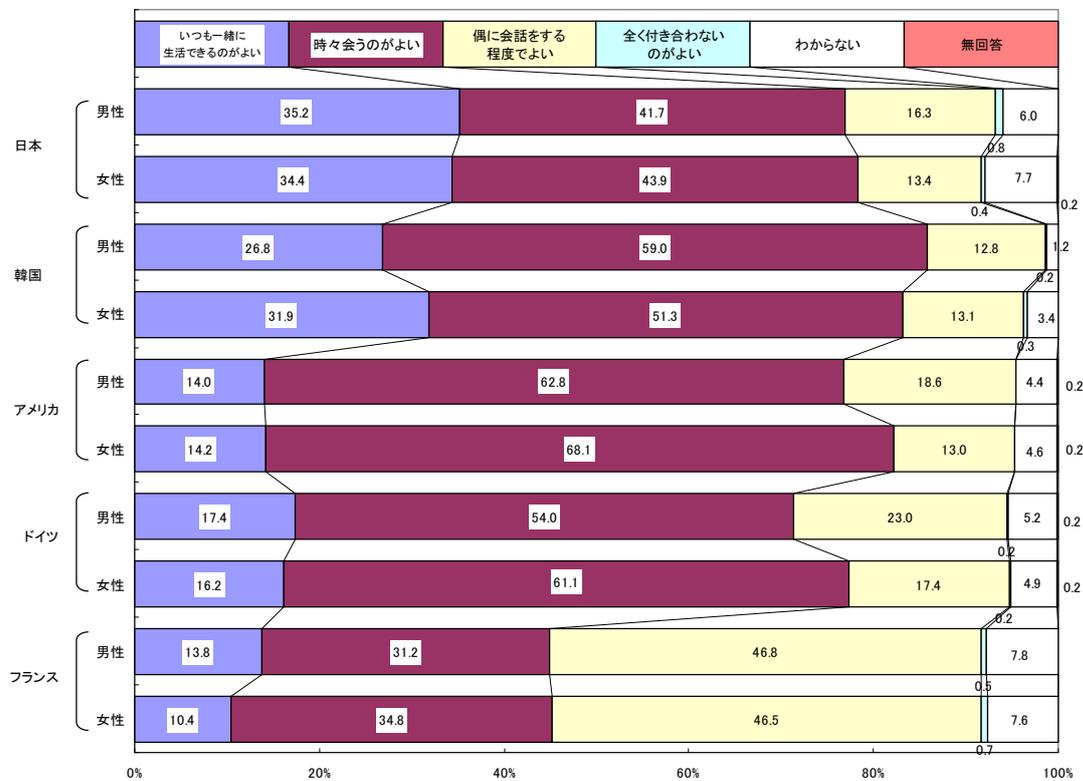
図 3-20(続き) 調査年次別・老後における子や孫との付き合い方



### 3 男女別比較

図 3-21 は、この設問に関する各国の調査結果を男女別に示したものである。全般的には、いずれの国にでも男女間の意見の相違は小さく、文化差のほうが目立つ。とりわけ日本は、男女がきわめて類似した意見傾向を示しており、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」は男性 41.7%、女性 43.9%、「いつも一緒に生活できるのがよい」は男性 35.2%、女性 34.4%と、変わらない比率が示された。

図 3-21 男女別・老後における子や孫との付き合い方



#### 4 年齢階層別比較

前節でみたように、この設問に対する回答傾向に明確な男女差はみられなかった。そこで、男女のサンプルを込みにして年齢階層別に傾向性をみていくことにしよう。

図 3-22 により、まず日本の状況をみると、「いつも一緒に生活できるのがよい」を支持する人の比率は、おおむね年齢階層が高くなるほど高くなり、60 歳代前半では 22.0% であるのに対し、85 歳以上では 54.8% に達している。一方で、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」を支持する人は、60 歳代前半で 57.0% であるものが、85 歳以上では 27.4% にとどまっている。韓国でも、日本ほどは顕著でないにせよ、同様の傾向がみいだせる。

欧米 3 カ国に関しては、「いつも一緒に生活できるのがよい」を支持する意見が、70 歳代後半から 80 歳前半あたりを境として増加する傾向がみられるものの、それはごく小幅な変化にとどまっている。いずれの年齢階層でも、アメリカとドイツでは「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が、フランスでは「たまに会話をする程度でよい」が、それぞれ最頻値となっていた。時系列的変化に関する知見も併せて考えると、欧米諸国における、子どもや孫とのつきあいに関する高齢者の意識は長期にわたり安定しているのに対し、日本や韓国では、近年急速に変化している様子がうかがえる。

図 3-22 老後における子や孫との付き合い方

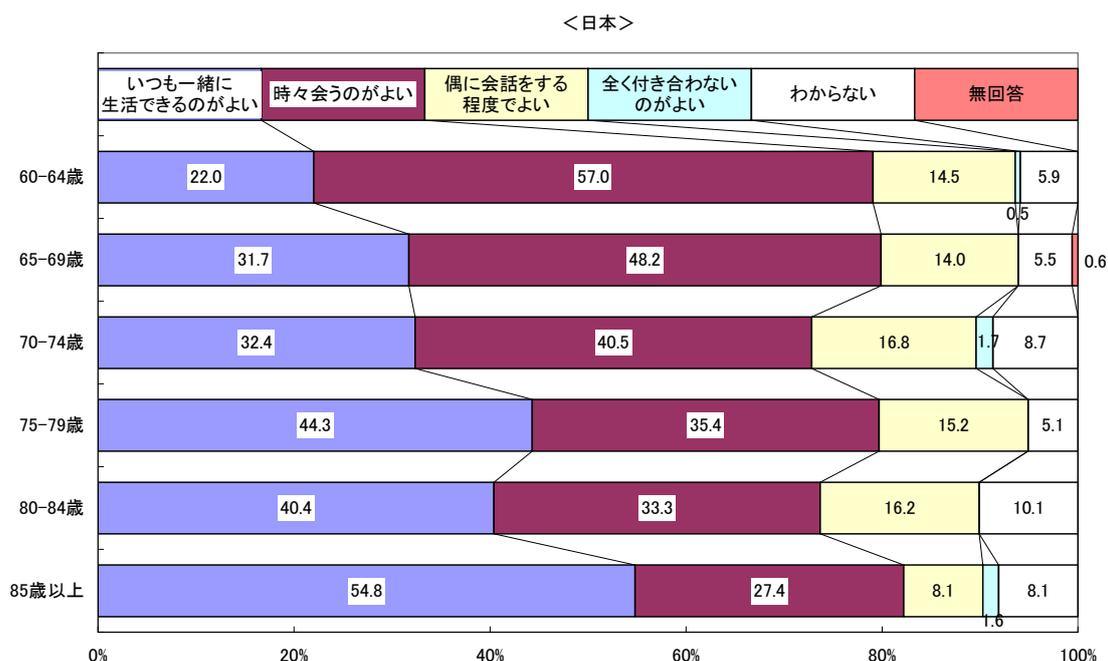
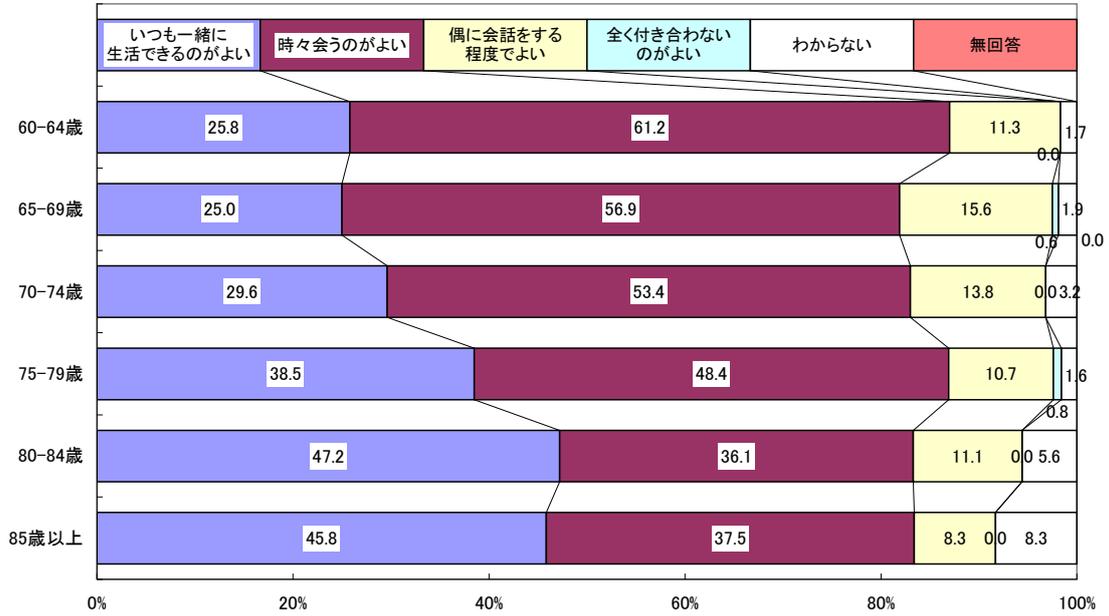


図 3-22(続き) 老後における子や孫との付き合い方

<韓国>



<アメリカ>

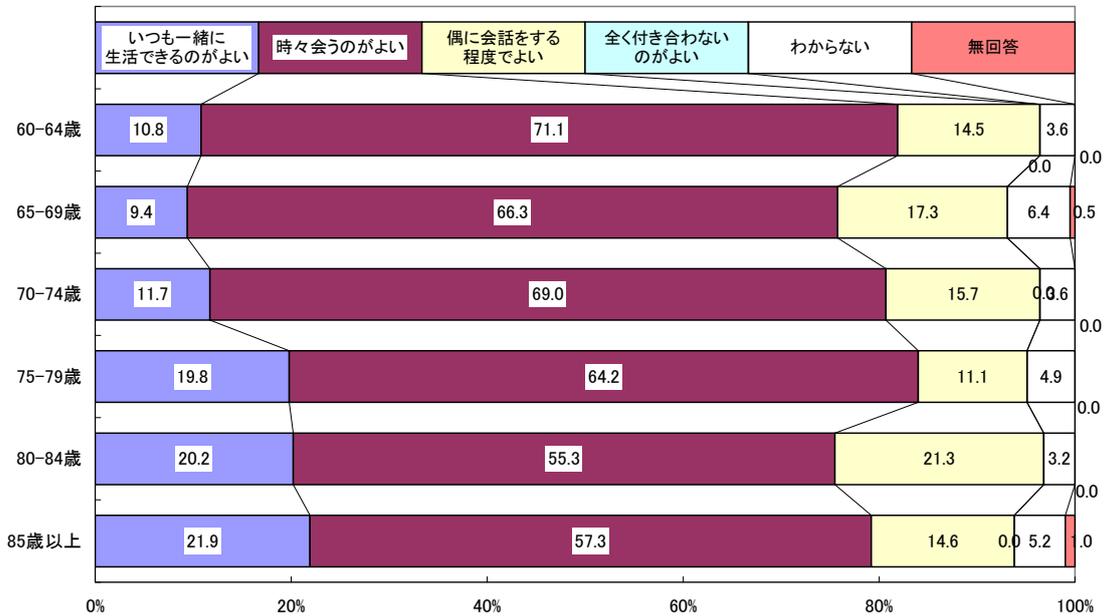
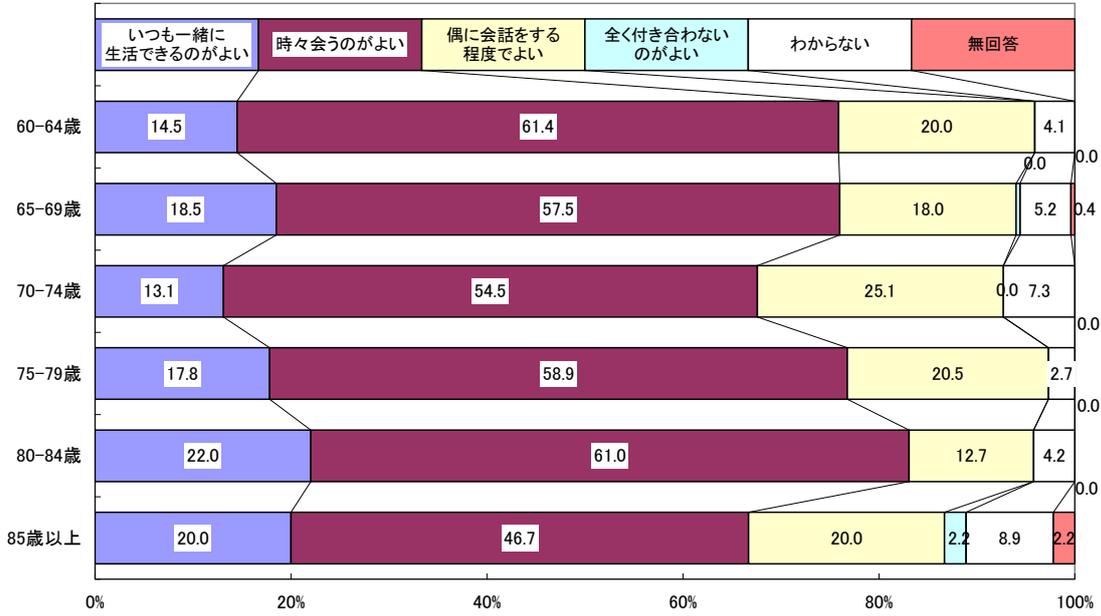
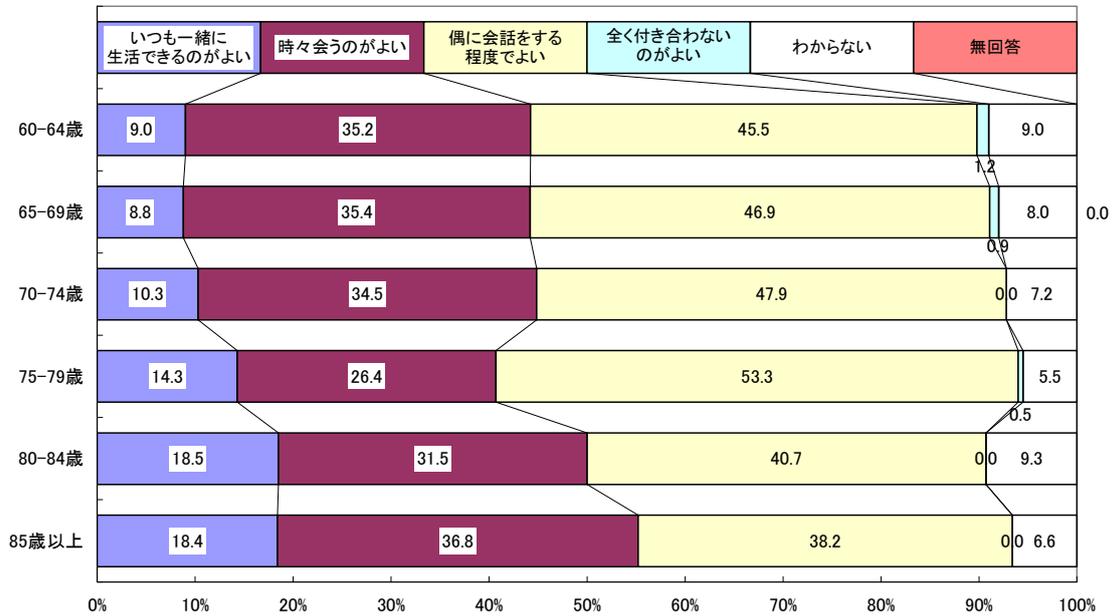


図 3-22(続き) 老後における子や孫との付き合い方

<ドイツ>



<フランス>



## 5 世帯類型と地域による差異

日本と韓国に限定して、家族観の項目と世帯類型および居住地の人口規模との関連を検討しよう。まず各人が生活している世帯の形態により、子どもや孫とのつきあい方に関する考え方に違いがあるか否かをみていく。図 3-23 によると、「いつも一緒に生活できるのがよい」を支持する意見は、三世帯世帯で群を抜いて高く、日本 80.9%、韓国 70.0%を占めている。単身世帯、夫婦世帯、夫婦と未婚の子からなる世帯では、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が、日韓ともに最頻値を示し、「いつも一緒に生活できるのがよい」を支持するものはせいぜい 20%強にすぎない。とくに日本の単身世帯においては、「たまに会話をする程度でよい」(20.4%) という回答も相対的に多く、「わからない」と答える人も 17.2%いた。

いずれの世帯類型のもとで生活する人も、現在の生活状態に調和的な家族観を抱きやすい傾向がみいだせる。各自の家族観ゆえに現在のような世帯構成を選んだのか、あるいは現在の世帯構成を合理化したり自身が納得するために特有の家族観を抱くようになったのか、おそらくその両面の影響関係があるものと考えられる。

図 3-23 世帯類型別・老後における子や孫の付き合い方

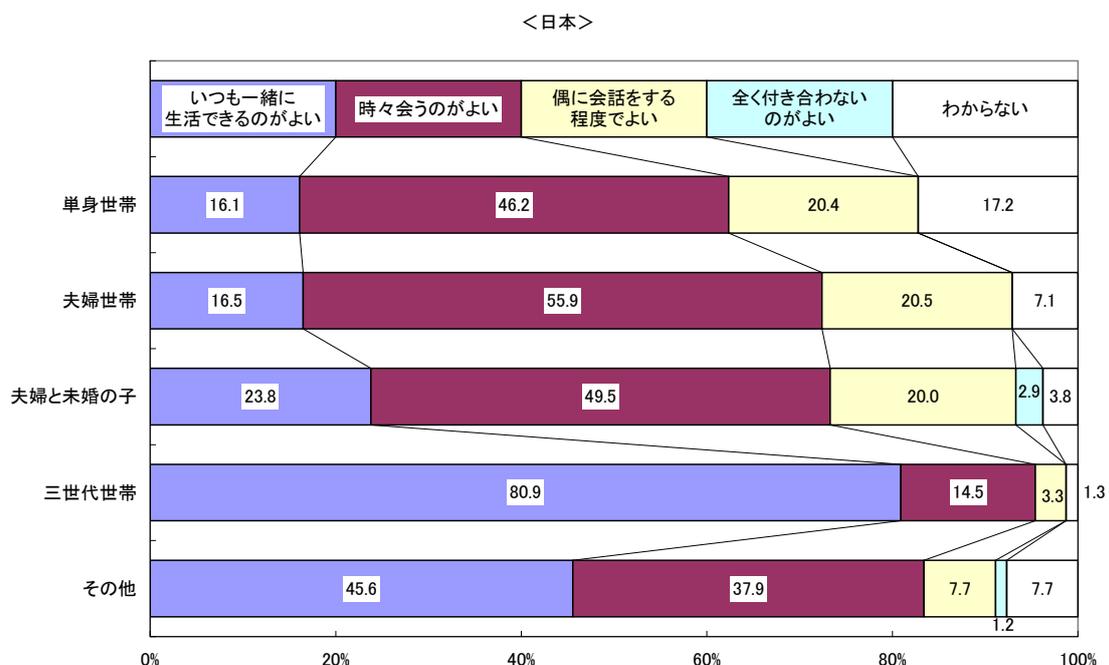
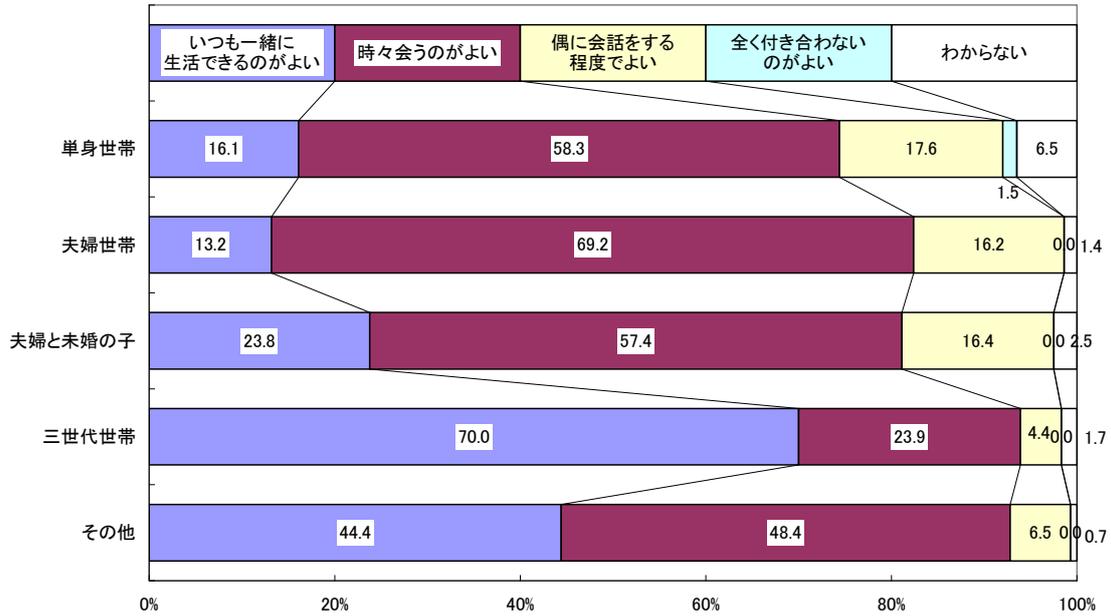


図 3-23(続き) 世帯類型別・老後における子や孫の付き合い方  
 <韓国>



居住地の人口規模との関連は、図 3-24 に示したとおりである。日本と韓国では、人口規模のカテゴリー区分が異なるため厳密な比較はできないが、韓国では地域区分による差異がほとんどみられないのに対し、日本は一定の傾向性が確認できる。すなわち、おおむね居住地の人口規模が大きいほど、「いつも一緒に生活できるのがよい」を支持するものが少なくなり、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」を支持するものが増加している。「いつも一緒に生活できるのがよい」という意見を支持するものの比率は、「郡部」44.4%、「5万人未満の都市」47.0%であるのに対し、「13大都市」では、23.6%と半分の比率にとどまった。

図 3-24 居住地域別・老後における子や孫の付き合い方

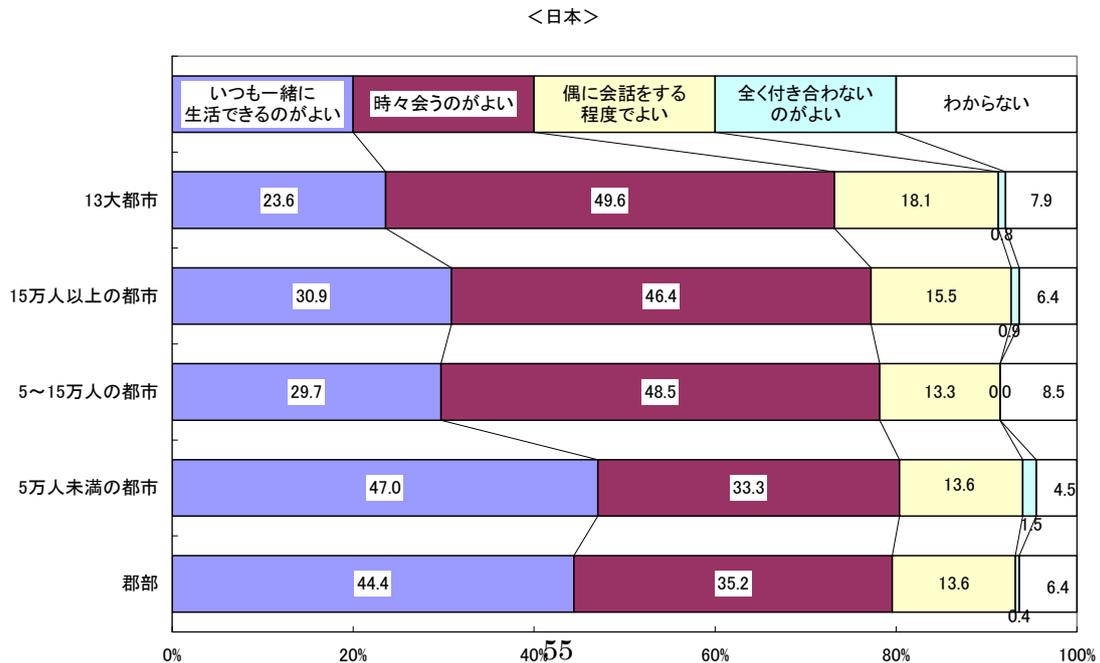
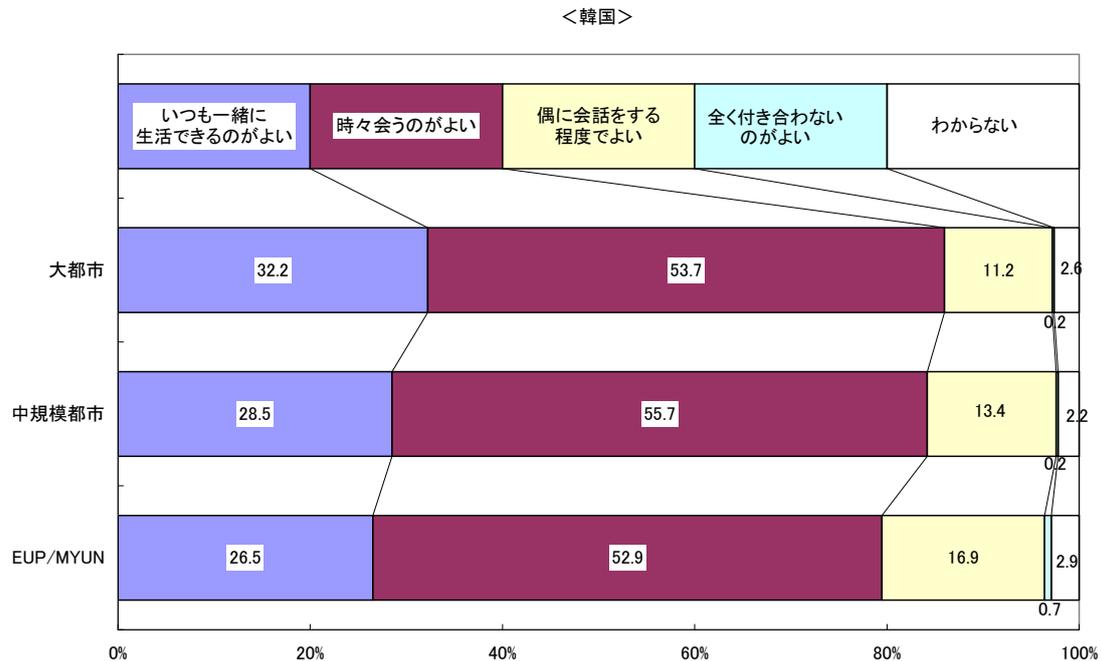


図 3-24(続き) 居住地域別・老後における子や孫の付き合い方



## VI 心の支えとなる人 (Q6)

### 1 調査結果の概要

図 3-25 は、心の支えとなる人として挙げられた、「配偶者あるいはパートナー」「子ども(養子を含む)」「その他」まで含め、8項目の各選択肢に対する肯定率を積み上げたものである。複数回答の合計比率に注目すると、日本 179.5、韓国 163.4、アメリカ 251.9、ドイツ 169.4、フランス 195.7となる。このことは、各国の調査対象者が「心の支えとなる人」として挙げた平均人数が、アメリカでは約 2.5 人、フランスは 2 人弱、日本、韓国、ドイツでは 1.6~1.8 人程度であることを意味し、アメリカの数値の高さが目立つ。なお、この図には記していないが、本設問にはもう一つ「誰もいない」という選択肢が用意されている。その比率は、日本 1.9%、韓国 4.2%、アメリカ 3.5%、ドイツ 7.9%、フランス 5.0%と、いずれの国もそれほど高いものではなかった。

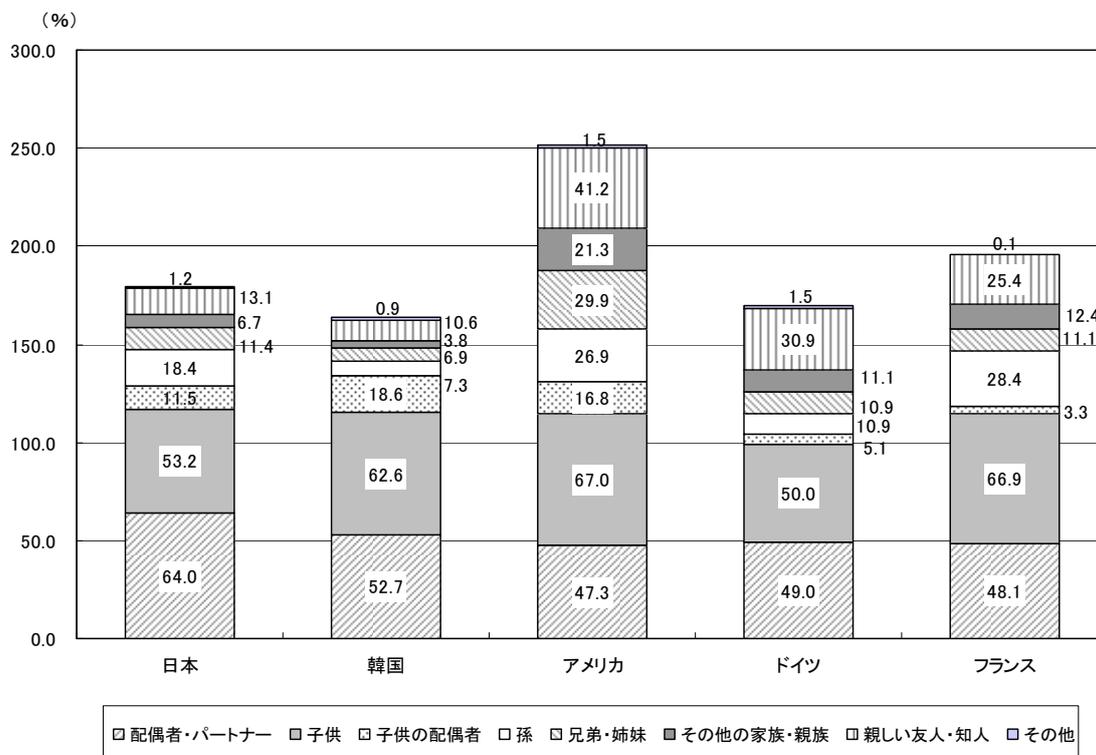
では、「心の支え」としてどのような人が挙げられているのだろうか。5カ国を通じて大きな比率を占めているのは「配偶者あるいはパートナー」と「子ども」であった。「配偶者あるいはパートナー」を挙げたものの比率は、日本 64.0%、韓国 52.7%、アメリカ 47.3%、ドイツ 49.0%、フランス 48.1%であった。また「子ども」を挙げたものの比率は、日本

53.2%、韓国 62.6%、アメリカ 67.0%、ドイツ 50.0%、フランス 66.9%となっている。日本では、子どもより配偶者を挙げる人が10ポイントほど多いのに対し、他の4カ国では、いずれも子どもを挙げる人のほうが多くなっている。とりわけ、アメリカとフランスでは、子どもを挙げる人は配偶者を挙げる人の比率に比べ、20ポイントほど高くなっていた。

ただし、図3-25は、そもそも配偶者や子どもがいないという人も含めた単純集計結果となっている点には留意したい。とりわけ配偶者に関しては、すでに亡くなっているという人が少なからずいる。実際、「心の支えとなる人」として「配偶者あるいはパートナー」を挙げる人の割合と、同居している配偶者がいるという人の割合（第2章参照）は、5カ国ともほぼ似通った数値を示している。配偶者あるいはパートナーについては、健在であれば、一般的には「心の支え」と感じているものと推測される。

もう一つ注目したいのは、「親しい友人・知人」を挙げるものの割合の差異である。アメリカの41.2%を筆頭として、ドイツ 30.9%、フランス 25.4%と、欧米3カ国では相対的に高いのに対し、日本は13.1%、韓国では10.6%と、低い値を示した。

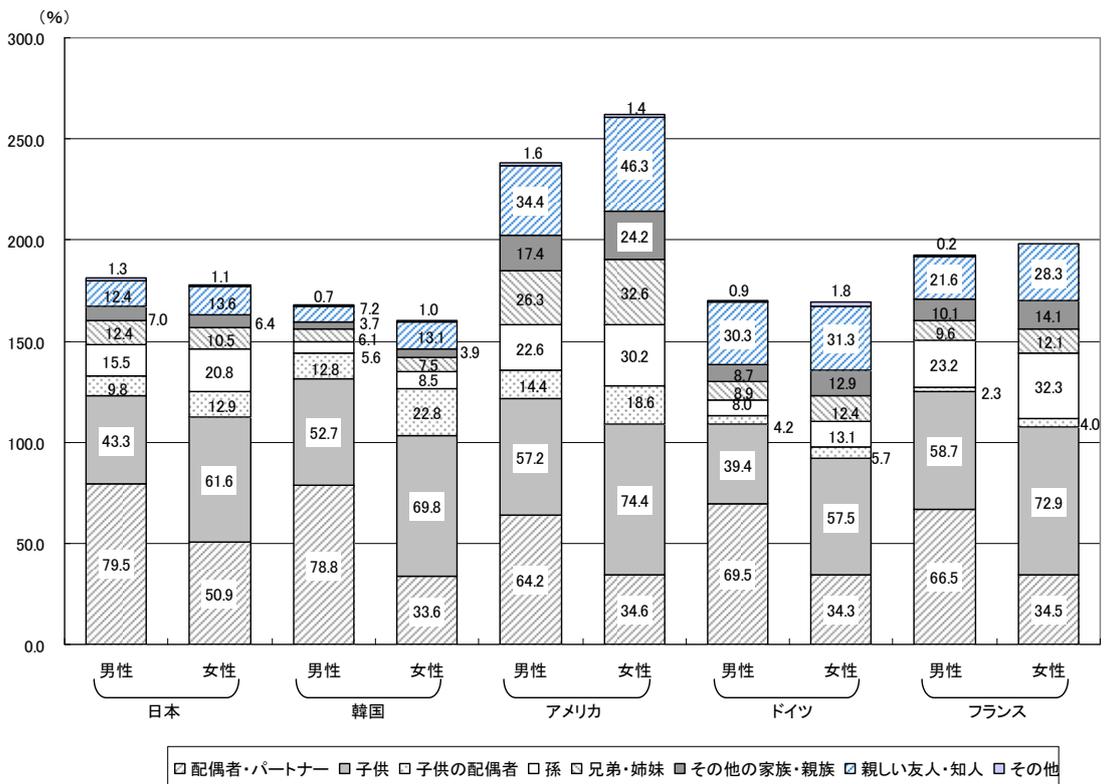
図3-25 心の支えとなる人(複数回答)



## 2 男女別比較

図 3-26 は、この設問に対する各国高齢者の回答を男女別に示したものである。複数回答の合計比率に注目すると、いずれの国でも著しい男女差はみられない。しかし、その内訳に注目し、とくに「配偶者あるいはパートナー」と「子ども」の比率をみると、5カ国に共通する男女の違いが確認できる。すなわち、この2つのカテゴリーを挙げる人が男女ともに多いとはいえ、男性は配偶者を、女性は子どもをより多く挙げる傾向が確認できる。日本についていえば、「配偶者あるいはパートナー」を挙げるものは、男性 79.5%に対し、女性 50.9%となっている。他方、「子ども」を挙げるものは、男性 43.3%に対し、女性 61.6%となっていた。ただしここでも、高齢期における有配偶率の男女差は考慮に入れなければならない。

図 3-26 男女別・心の支えとなる人



### 3 年齢階層別比較

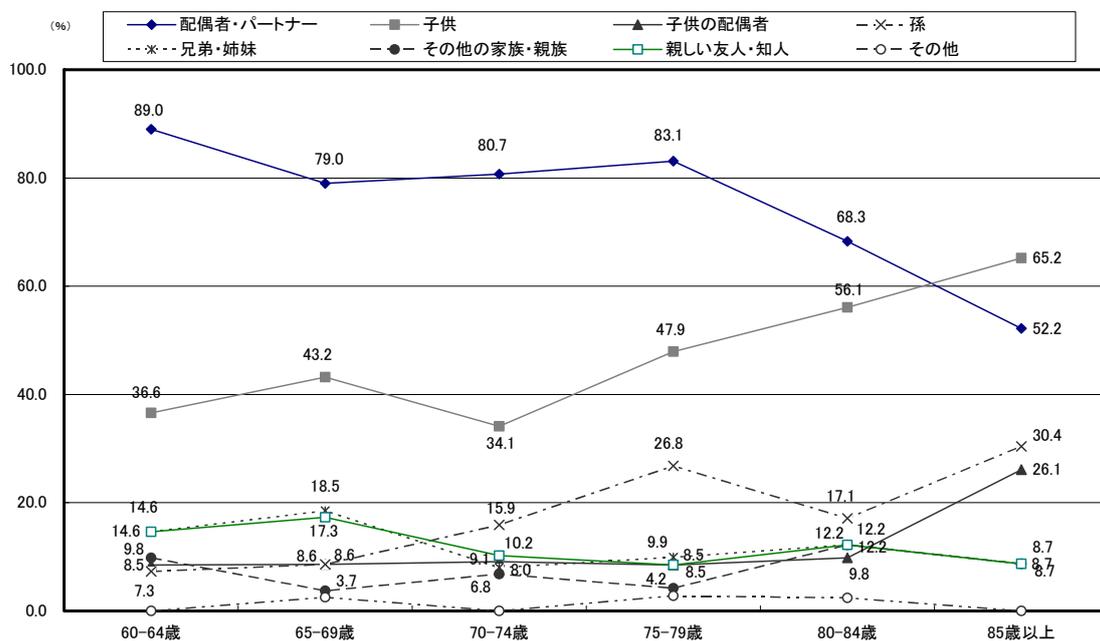
前項でみたように、「心の支えとなる人」との関係性については男女差が大きく、その背景には有配偶率の男女差があるのではないかと推測された。高齢者の場合、有配偶率は年齢階層が高いほど低下し、また男女の有配偶率の差も大きくなる。したがってここでは、各国の男女別・年齢階層別の「心の支えとなる人」の傾向性をみることにしよう。

図 3-27 によると、各国の男女ともに「配偶者あるいはパートナー」を挙げるものの比率は年齢が高くなるにしたがっておおむね低下しており、この推移は第 2 章で見た性別・年齢階層別の有配偶率の変化にほぼ対応している。したがって、年齢階層の上昇にともなうその比率の低下は、男性に比べて女性のほうが顕著である。そして、配偶者の不在を補うかのように、「子ども」を挙げる人は年齢の上昇とともにおおむね増加する。とりわけ女性は、いずれの年齢階層でも「子ども」を挙げる人の比率が男性より高く、有配偶率の男女差だけでは説明できない差異を示している。

「親しい友人・知人」を挙げる人の比率については、年齢階層が高いほど低下する（日本男性、アメリカ男性、アメリカ女性）、年齢にかかわらずほぼ一定している（フランス男性、フランス女性）などのほか、不規則な動きを示すグループもある。全体としては、年齢階層の高まりによる友人づきあいの衰退は、みられるとしても著しい低下とはいえ、高齢期の全過程にわたり一定の役割を果たしているといえる。

図 3-27 男女別年齢階層別・心の支えとなる人

<日本男性>



<日本女性>

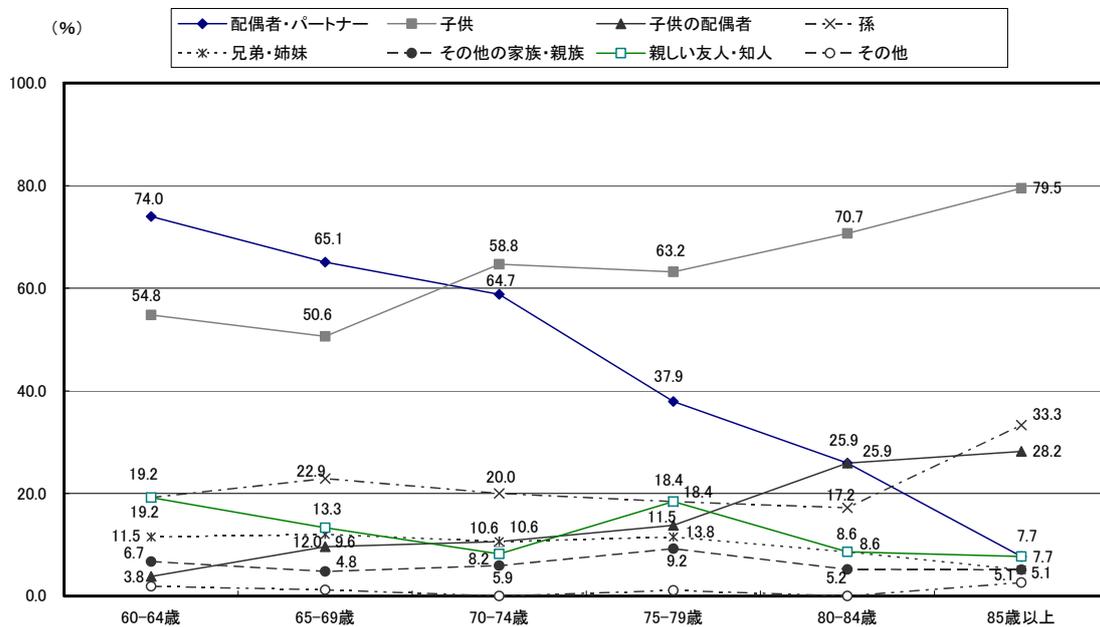
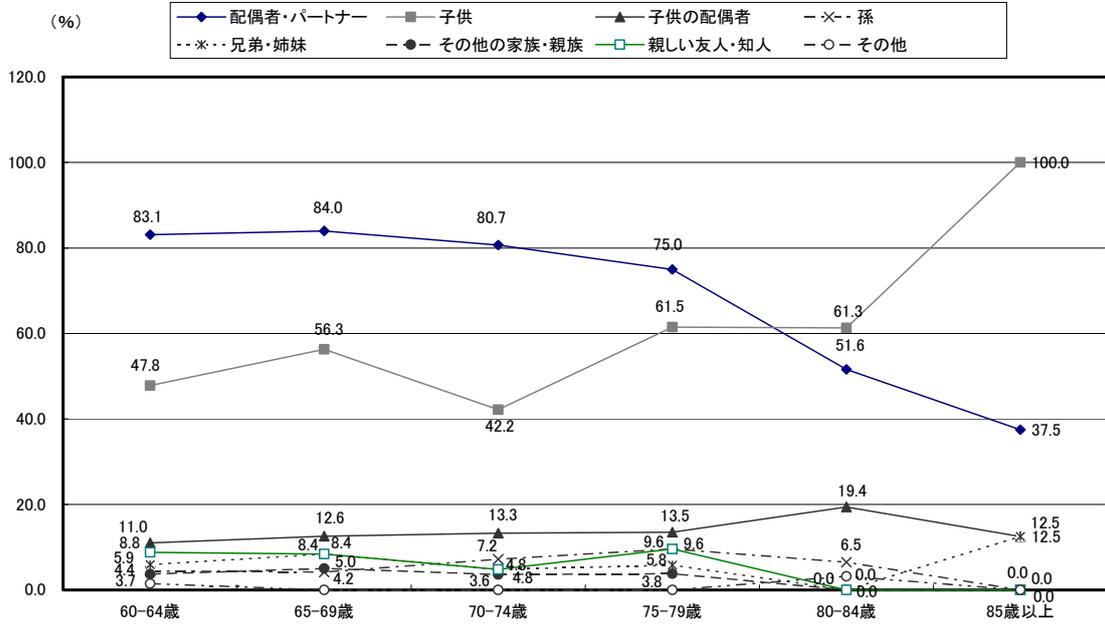


図 3-27(続き) 男女別年齢階層別・心の支えとなる人

<韓国男性>



<韓国女性>

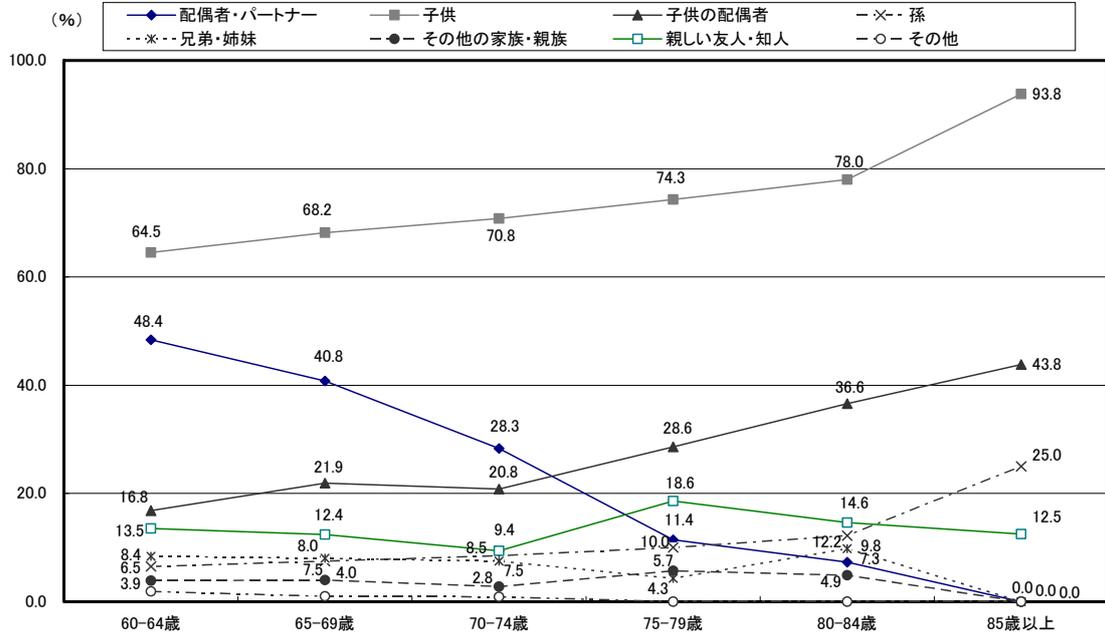


図 3-27(続き) 男女別年齢階層別・心の支えとなる人

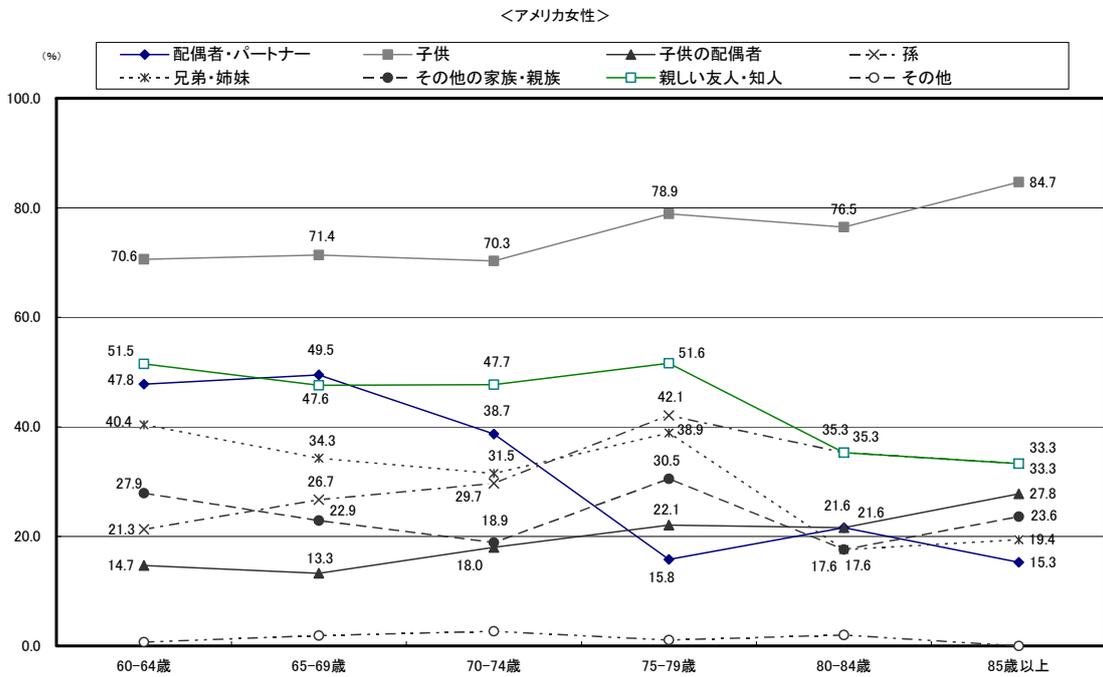
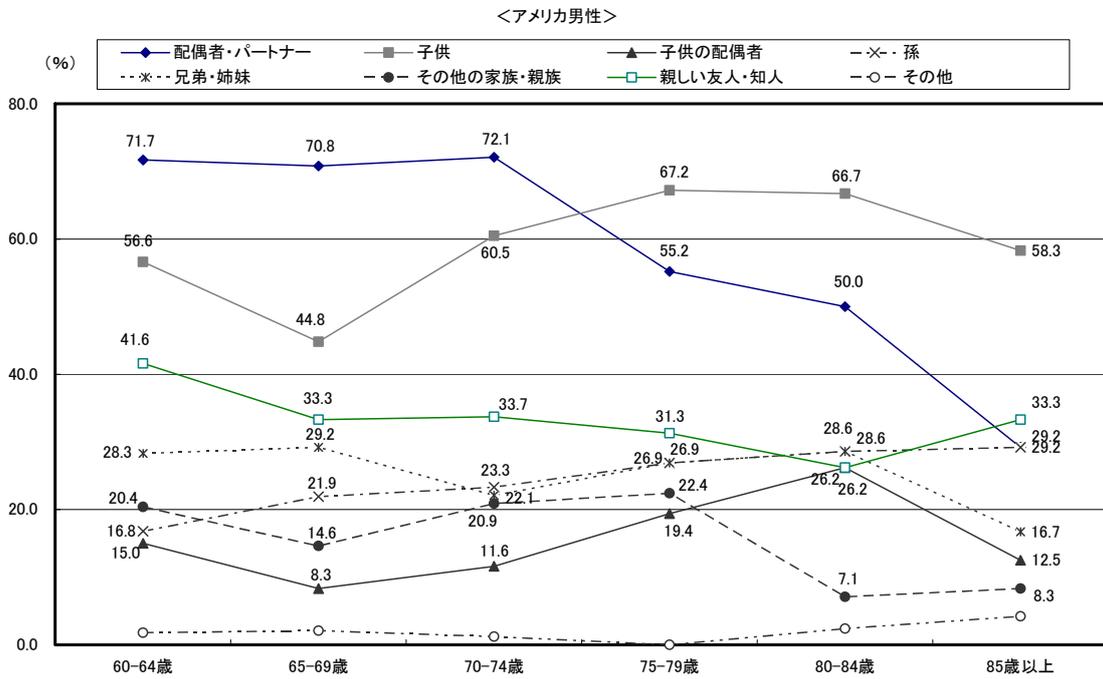


図 3-27(続き) 男女別年齢階層別・心の支えとなる人

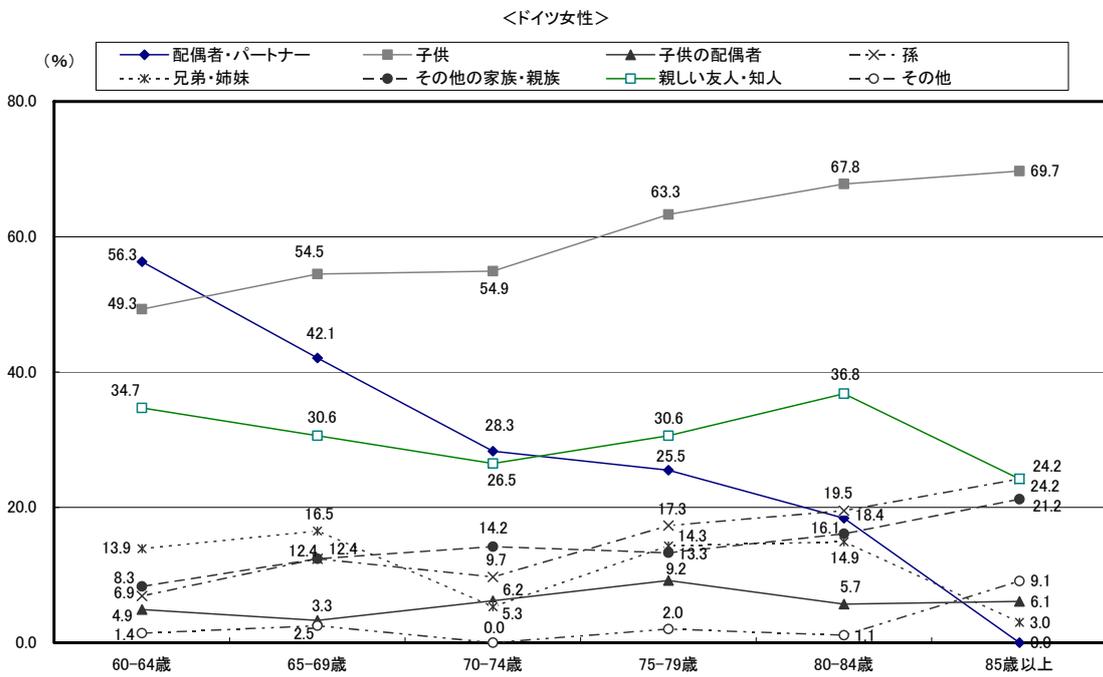
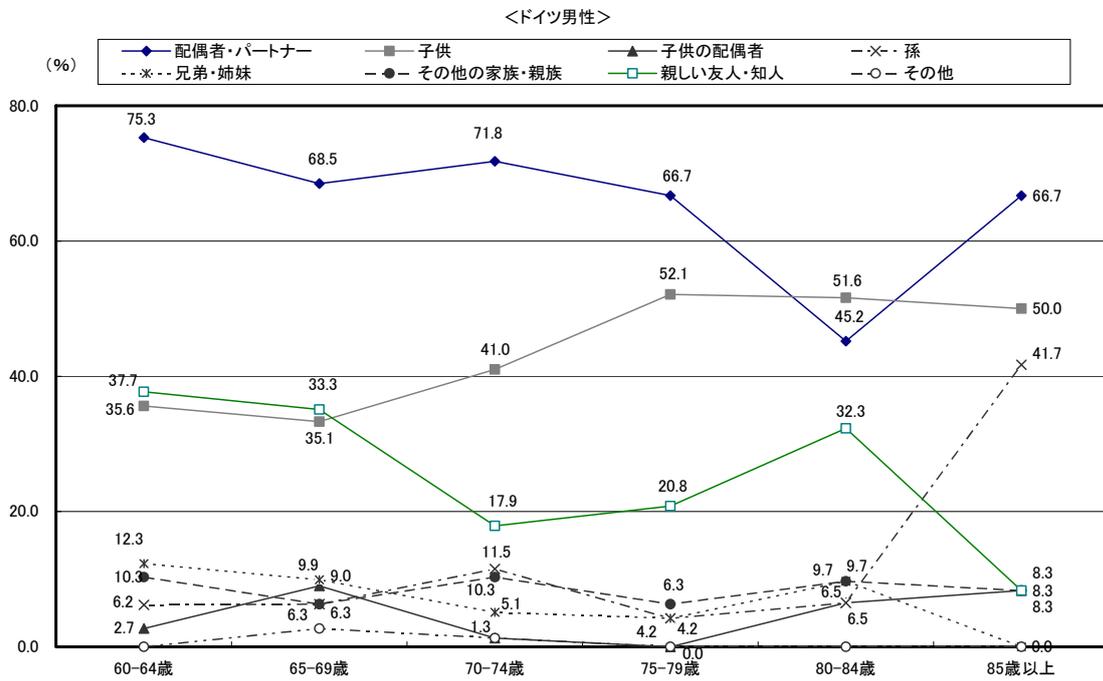
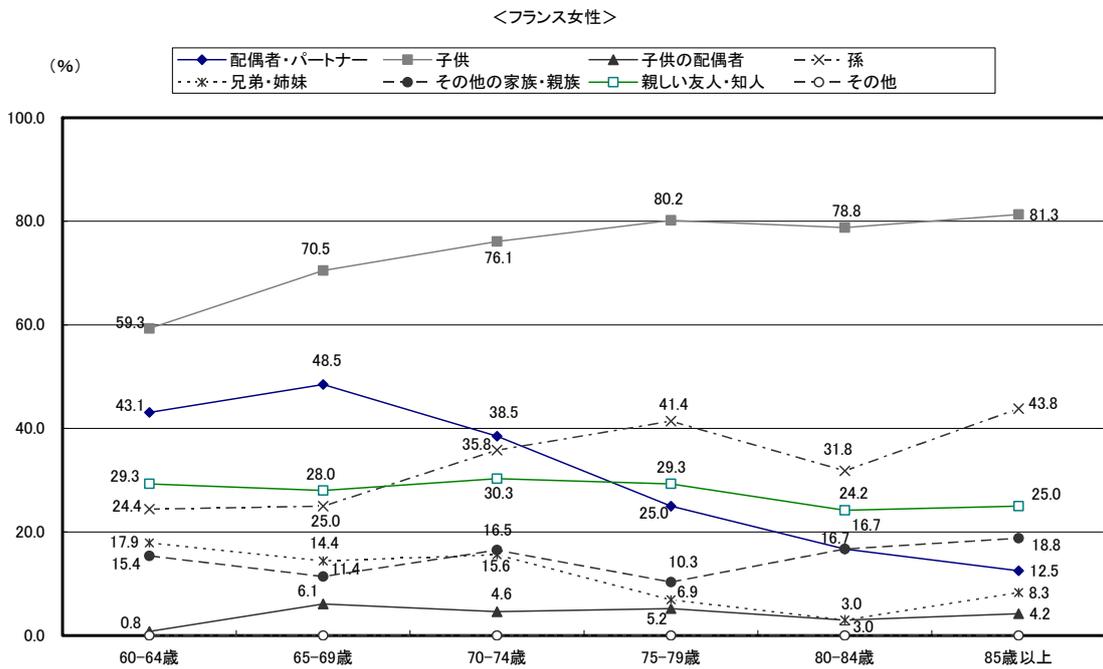
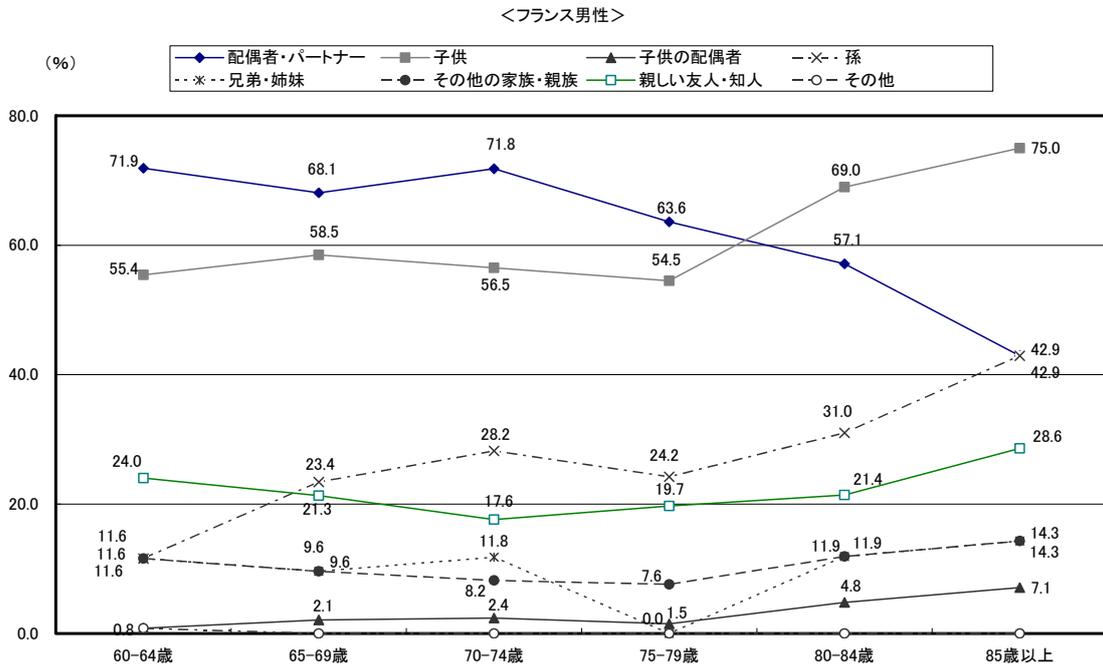


図 3-27(続き) 男女別年齢階層別・心の支えとなる人



#### 4 世帯類型による差異

図 3-28 は、日本と韓国につき、世帯類型別に「心の支えとなる人」の 카테고리別の肯定率を示したものである。各世帯類型において最も高い比率を示すカテゴリーは、日韓に共通しており、単身世帯は「子ども」(日本 61.3%、韓国 72.9%)、夫婦世帯は「配偶者」(日本 93.2%、韓国 93.1%)、夫婦と未婚の子の世帯では「配偶者」(日本 88.6%、韓国 85.2%)、三世代世帯では「子ども」(日本 67.8%、韓国 80.6%)であった。両国とも、世帯類型の違いにかかわらず、配偶者と子どもは多くの高齢者に「心の支え」として認識されている。ただし、夫婦世帯および配偶者と未婚の子の世帯における「配偶者」が挙げられる比率はほぼ似通っているものの、単身世帯および三世代世帯で「子ども」を挙げる人の比率は、日本より韓国のほうが 10 ポイント以上高くなっている。

また、とくに三世代世帯に注目すると、日本では、「子ども」67.8%、「配偶者あるいはパートナー」50.7%、「孫」41.4%、「子どもの配偶者」25.0%と、構成メンバーのすべてにわたり比較的高い比率を示すところが特徴的である。他方、韓国では、80.6%を示す「子ども」以外のカテゴリーでは、「子どもの配偶者」29.4%、「配偶者」27.8%、「孫」11.7%と相対的に低い比率にとどまっていた。

日韓の単身世帯に注目すると、「子ども」が最も高い比率を示す以外に、「親しい友人・知人」(日本 28.0%、韓国 20.1%)、「兄弟・姉妹」(日本 15.1%、韓国 9.0%)などが、他の世帯類型の場合よりわずかながら高い比率を示す点で共通する特徴を示していた。

全般的には、世帯類型と近親や友人などにより形成される社会的ネットワークとの間には、日韓に共通する傾向性が確認できた。

図 3-28 世帯類型別・心の支えとなる人

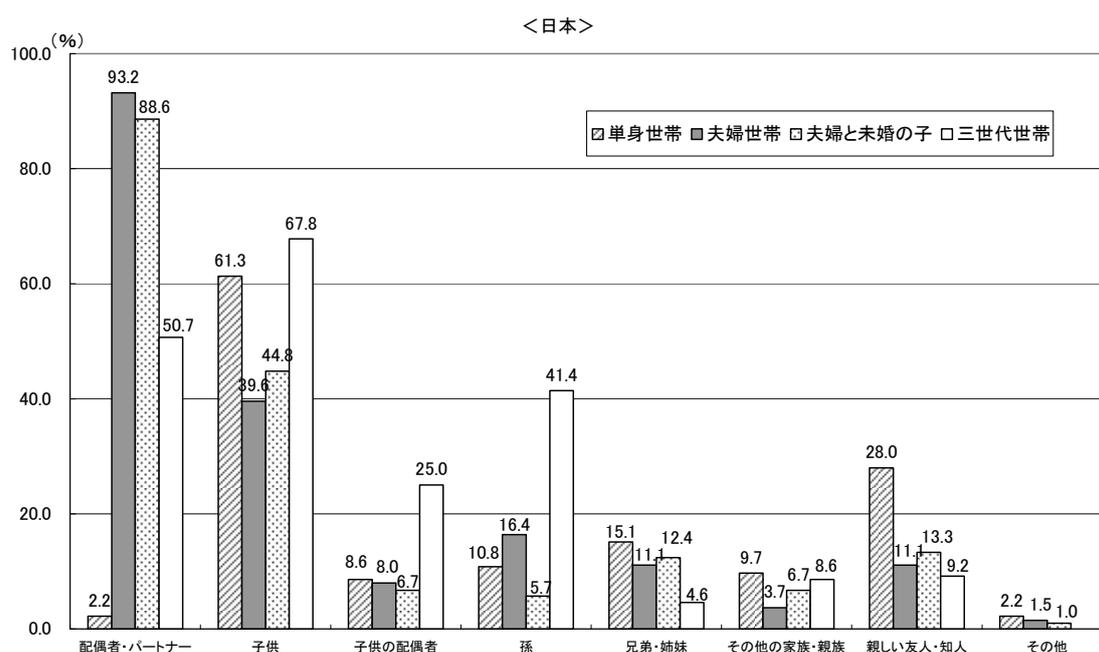


図 3-28(続き) 世帯類型別・心の支えとなる人

